

# 力学 A シケフリ

## 1. 運動の法則

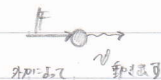
### 1-1. 運動の記述

ある物体に外力により引き起こされた運動状態の変化を定量的に記述する方法を学ぶ。具体的には位置や力をベクトルで表記し、

式としてその関係を記述していく。

最終的には任意の時間変化する物理量を  $x(t)$  (時間)

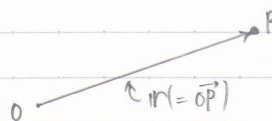
のみの関数で表し、未来を予測できるようにするのが目標である。



## ベクトルの表記と(簡単な)演算

### 表記

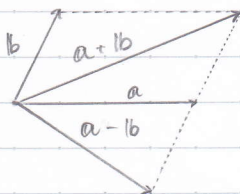
$a, b, c$  : ボールド体 ← 主にこちらを使用する  
 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$  : 上に矢印



大きさは  $(a) = |\vec{a}|$  と表記する

### 演算

#### ① 和・差

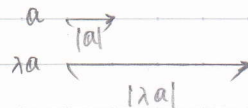


$$\begin{cases} a + b = b + a & (\text{交換則}) \\ (a + b) + c = a + (b + c) & (\text{結合則}) \end{cases}$$

#### ② スカラー倍

$\lambda \in \mathbb{R}$  として

" $\lambda a$ " は  $a$  と **平行** で長さ  $a$  の  $\lambda$  倍のベクトル



$$\begin{cases} \lambda a \parallel a \\ |\lambda a| = |\lambda| |a| \\ \lambda > 0 \text{ のとき同じ向き, } \lambda < 0 \text{ のとき逆向き} \end{cases}$$

### ※ 零ベクトルと逆ベクトル

#### ・ 零ベクトル

$0$  ( $\vec{0}$ ): 大きさがゼロのベクトル (スカラーではない),  $|0| = 0$

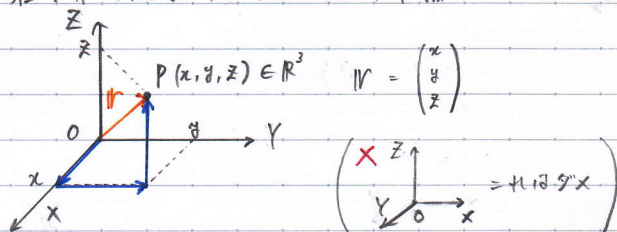
#### ・ 逆ベクトル

$-a$ :  $a$  と大きさが等しく、向きが逆のベクトル,  $a + (-a) = 0$



## ・デカルト座標系

- ・基準となる点を  $O(0,0,0)$  とする
- ・3次元空間内で3つの直交する座標を  $X$  軸,  $Y$  軸,  $Z$  軸 とおく
- ・右手系 (親指, 人差し指, 中指) であることに注意



- ・基底ベクトルについて

基底ベクトルとは **各軸に平行で、(正方向) 大きさが 1** のベクトルのこと

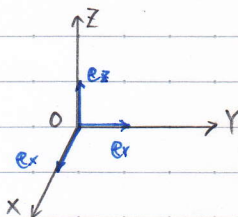
$$\begin{cases} e_x: X \text{ 軸正方向}, |e_x| = 1 \\ e_y: Y \text{ 軸正方向}, |e_y| = 1 \\ e_z: Z \text{ 軸正方向}, |e_z| = 1 \end{cases}$$

これらを用いて、 $r$  を  $e_x, e_y, e_z$  の結合の形で表したとき、各基底ベクトルの係数がそれぞれ  $x, y, z$  の座標となる (これが本来座標の定義)

$$\vec{OP} = r, P(x, y, z) \text{ のとき}$$

$$r = x e_x + y e_y + z e_z$$

と表せる



## ・位置の時間変化 (速度と加速度)

- ・ **速度** 三位置ベクトルの時間変化率 (微小時間にとれただけ微小)

$$v(t) \equiv \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{r(t+\Delta t) - r(t)}{\Delta t} = \frac{dr(t)}{dt} = \dot{r}(t)$$

- ・ **加速度** 三速度ベクトルの時間変化率

$$a(t) \equiv \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{v(t+\Delta t) - v(t)}{\Delta t} = \frac{dv(t)}{dt} = \frac{d^2 r(t)}{dt^2} = \ddot{r}(t)$$

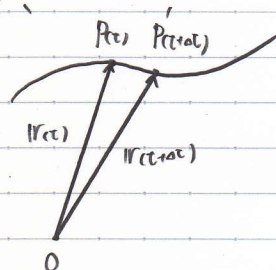
デカルト座標系において  $e_x, e_y, e_z$  を用いて表せば、

$$r(t) = x(t) e_x + y(t) e_y + z(t) e_z \quad \text{ここで微分}$$

$$v(t) = \frac{dx(t)}{dt} e_x + \frac{dy(t)}{dt} e_y + \frac{dz(t)}{dt} e_z \quad \text{ここで微分}$$

$$a(t) = \frac{d^2 x(t)}{dt^2} e_x + \frac{d^2 y(t)}{dt^2} e_y + \frac{d^2 z(t)}{dt^2} e_z$$

(※ ここで  $e_x, e_y, e_z$  は  $t$  (時間) に依存しないので、  
係数のみで  $t$  で微分すれば良いことに注意)



## 1-2 運動の法則

ニュートンの3法則について取り扱う。これらは原理なので受け入れるしかない。

### ① 慣性の法則

物体に外力が働かないとき、その物体の速度は変化しない。

すなわち、このとき  $v(t) = \text{定数ベクトル}$  となり、等速直線運動か静止し続ける。(もちろん  $a(t) = \frac{dv(t)}{dt} = 0$ )

### ② 運動方程式

物体の運動量(質量×速度)は外力の方向に沿って起り、微小時間内における運動量の単位時間あたりの変化の大きさは外力の大きさに等しい。

…というのが原義だが、簡単に言い直すと、

質量×加速度の積(ベクトルのスカラー倍)は、外力ベクトルに等しい。

式で表すと、

$$\frac{d(p(t))}{dt} = F \Leftrightarrow m \frac{dv(t)}{dt} = F \Leftrightarrow m \ddot{r} = F \quad (p(t) = m v(t))$$

### ③ 作用・反作用の法則

すべての作用に対して、等しい大きさで反対方向の反作用が存在する

すなわち、

物体Aが物体Bに対して力Fを及ぼすならば、物体Bは物体Aに対して力 $-F$ を及ぼす。

※ 外力について

F…ベクトル量、作用・反作用の法則が成立する

今は知らなくて良い

種類は、

基本的な力: 万有引力, クーロン力(電磁力) (強い相互作用, 弱い相互作用)

有効的な力: 摩擦力, 弾性力, 抵抗力, 抗力など

(本来は上4つの相互作用が自然界での相互作用であり、全ての力(下の例など)はこれらの力の組み合わせであるが、ここでは割愛する。)

※ 質量について

ここでの質量は慣性質量である。一応軽く触れるか、あがり気にしなくてよい。

・慣性質量…物体の慣性(物体の性質)の大きさに比例する。物質の量

・重力質量…物体に働く重力の大きさが物質の量の大きさに比例することを利用して、重力を比較することによって計測された物質の量

今は区別しないことにする。

これらの法則が成立する座標系を **慣性座標系** と呼ぶ。

### 1-3 ベクトルの演算

物理で必要なベクトルの演算の基本。(全て既知だとは思いますが、念のため。)

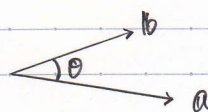
#### ・内積

**定義** :  $a$  と  $b$  の内積は  $a \cdot b = |a| |b| \cos \theta$  (ただし、 $\theta$  は 2 ベクトルのなす角)

**成立する法則**

↑ スカラーであることに注意!

$$\begin{cases} a \cdot b = b \cdot a & (\text{交換則}) \\ (\lambda a) \cdot b = \lambda (a \cdot b) & (\text{スカラー倍}) \\ c \cdot (a + b) = c \cdot a + c \cdot b & (\text{分配則}) \end{cases}$$

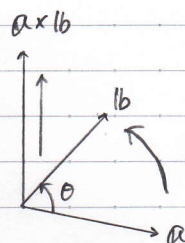


#### ・外積

**定義** :  $a$  と  $b$  の外積ベクトルを  $a \times b$  と表し、これは

**向き** :  $a$  と  $b$  のいずれにも垂直、 $a \rightarrow b$  に重なるように回転させたとき、右ネジが進む向き。  
**大きさ** :  $|a| |b| \sin \theta$  ( $\theta$  は上と同様)

のベクトル



**法則**

$$\begin{cases} a \times b = -b \times a & (\leftarrow \text{交換則は成立しないので注意!!}) \\ (\lambda a) \times b = \lambda (a \times b) & (\text{スカラー倍}) \\ c \times (a + b) = c \times a + c \times b & (\text{分配則}) \end{cases}$$

※ ベクトルのノルム (大きさ) 関連について

$|a|$  ...  $a$  の「大きさ」を表すスカラー

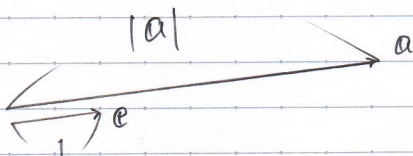
・ ノルムによる規格化

$a$  というベクトルがあったとき

$$a \cdot a = |a| \cdot |a| \cdot \cos 0 = |a|^2$$

$|a| \neq 0$  のとき

$\frac{a}{|a|} = e$  : 大きさが 1, 方向は  $a$  と同方向のベクトル (**単位ベクトル**)



※基底ベクトルの内積と外積 (結構使うので覚えておく)

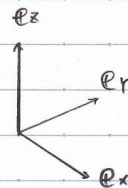
・内積

$$\begin{cases} \mathbf{e}_x \cdot \mathbf{e}_x = 1, & \mathbf{e}_y \cdot \mathbf{e}_y = 1, & \mathbf{e}_z \cdot \mathbf{e}_z = 1 \\ \mathbf{e}_x \cdot \mathbf{e}_y = 0, & \mathbf{e}_y \cdot \mathbf{e}_z = 0, & \mathbf{e}_z \cdot \mathbf{e}_x = 0 \end{cases}$$

・外積

$$\begin{cases} \mathbf{e}_x \times \mathbf{e}_x = \mathbf{0}, & \mathbf{e}_y \times \mathbf{e}_y = \mathbf{0}, & \mathbf{e}_z \times \mathbf{e}_z = \mathbf{0} \\ \mathbf{e}_x \times \mathbf{e}_y = \mathbf{e}_z, & \mathbf{e}_y \times \mathbf{e}_z = \mathbf{e}_x, & \mathbf{e}_z \times \mathbf{e}_x = \mathbf{e}_y \end{cases}$$

↑もちろん左辺を逆にしたら右辺に  $-$  がつくことに注意!!



※内積と外積の成分表示

$$\mathbf{a} = (a_x \ a_y \ a_z), \mathbf{b} = (b_x \ b_y \ b_z) \text{ とする。}$$

$$\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = a_x b_x + a_y b_y + a_z b_z$$

$$\mathbf{a} \times \mathbf{b} = \begin{pmatrix} a_y b_z - a_z b_y \\ a_z b_x - a_x b_z \\ a_x b_y - a_y b_x \end{pmatrix} = (a_y b_z - a_z b_y) \mathbf{e}_z + (a_z b_x - a_x b_z) \mathbf{e}_y + (a_x b_y - a_y b_x) \mathbf{e}_x$$

これは、 $\mathbf{a} = a_x \mathbf{e}_x + a_y \mathbf{e}_y + a_z \mathbf{e}_z$ ,  $\mathbf{b} = b_x \mathbf{e}_x + b_y \mathbf{e}_y + b_z \mathbf{e}_z$  であることを用いて、上記の規則に従って計算すれば導出できる。

<覚え方> ~外積の成分がどうしても覚えられない人のために~

	x	y	z	x
① a	$a_x$	$a_y$	$a_z$	$a_x$
② b	$b_x$	$b_y$	$b_z$	$b_x$

②  $a_x b_y - a_y b_x$  : z成分

③  $a_y b_z - a_z b_y$  : x成分

④  $a_z b_x - a_x b_z$  : y成分

① まず左のように  $\mathbf{a}$  と  $\mathbf{b}$  の成分をそろえる

② 4つで  $\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$  の  $ad - bc$  (detで可) をする

いはい、xとy成分で  $ad - bc$  をしたので、出てくるのは、 $\mathbf{a} \times \mathbf{b}$  のz成分

③, ④ : ②のくり替えし

※覚えておくとした嬉しいもの (自慢出来る) ← 本当は重要だけど、今回は出て来ない、はい

$$\mathbf{a} \times (\mathbf{b} \times \mathbf{c}) = (\mathbf{a} \cdot \mathbf{c}) \mathbf{b} - (\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}) \mathbf{c}$$

# 1-4. 運動の保存量・保存則

・積分

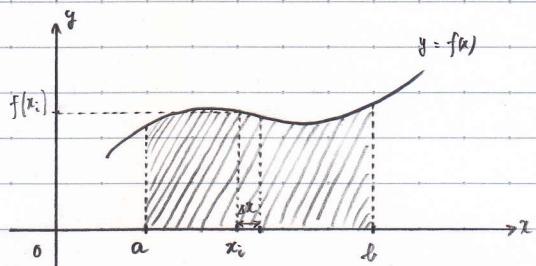
関数  $f(x)$  を  $x$  の区間  $[a, b]$  で積分する

$$\Delta x = \frac{b-a}{n}, \quad x_i = a + i \cdot \Delta x \quad (i=0, 1, \dots, n)$$

$$(x_0 = a, x_n = b)$$

とすると

$$\lim_{\Delta x \rightarrow 0} \sum_{i=0}^n f(x_i) \Delta x = \int_a^b f(x) dx$$



また、基底ベクトル  $e_i$  に依存しないときは

$$\int_{t_1}^{t_2} \mathbf{F}(t) dt = \int_{t_1}^{t_2} \left\{ F_x(t) \mathbf{e}_x + F_y(t) \mathbf{e}_y + F_z(t) \mathbf{e}_z \right\} dt$$

$$= \left\{ \int_{t_1}^{t_2} F_x(t) dt \right\} \mathbf{e}_x + \left\{ \int_{t_1}^{t_2} F_y(t) dt \right\} \mathbf{e}_y + \left\{ \int_{t_1}^{t_2} F_z(t) dt \right\} \mathbf{e}_z$$

(1) 運動量の時間変化と力積

$\mathbf{p} \equiv m\mathbf{v}$  : 運動量 (定義)

$$m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = \mathbf{F}(t)$$

$$\therefore \frac{d(m\mathbf{v})}{dt} = \mathbf{F}(t)$$

$$\therefore \frac{d\mathbf{p}(t)}{dt} = \mathbf{F}(t)$$

両辺を  $t$  で積分して

$$\int_{t_1}^{t_2} d\mathbf{p}(t) = \int_{t_1}^{t_2} \mathbf{F}(t) dt \quad \therefore \left[ \mathbf{p}(t) \right]_{t_1}^{t_2} = \mathbf{p}(t_2) - \mathbf{p}(t_1) = \int_{t_1}^{t_2} \mathbf{F}(t) dt \equiv \text{力積}$$

$$\mathbf{p}(t_2) - \mathbf{p}(t_1) = m\mathbf{v}(t_2) - m\mathbf{v}(t_1) = \int_{t_1}^{t_2} \mathbf{F}(t) dt \equiv \text{力積}$$

運動量変化は、外力による力積に等しい

今回は出て来ないが、力積が0のとき、**運動量保存則**が成立する

## (2) 角運動量の時間変化と力のモーメント

$$\mathbf{L} \equiv \mathbf{r} \times \mathbf{p} = m\mathbf{r} \times \frac{d\mathbf{r}}{dt} = m\mathbf{r} \times \mathbf{v} : \text{角運動量 (定義)}$$

角運動量の時間変化を考える

$$\frac{d}{dt} \mathbf{L} = m \frac{d\mathbf{r}}{dt} \times \frac{d\mathbf{r}}{dt} + m\mathbf{r} \times \frac{d^2\mathbf{r}}{dt^2} \quad (\text{上の定義式とライプニッツ則を用いた})$$

$$= \mathbf{r} \times m \frac{d^2\mathbf{r}}{dt^2}$$

$$= \mathbf{r} \times \mathbf{F}$$

$$\equiv \mathbf{M} : \text{力のモーメント (定義)} \quad \cdots \textcircled{*}$$

両辺で積分して

$$\int_{\mathbf{L}(t_1)}^{\mathbf{L}(t_2)} d\mathbf{L} = \int_{t_1}^{t_2} (\mathbf{r} \times \mathbf{F}) dt = \int_{t_1}^{t_2} \mathbf{M} dt$$

$$\therefore \mathbf{L}(t_2) - \mathbf{L}(t_1) = \int_{t_1}^{t_2} \mathbf{M} dt$$

$$\mathbf{L}(t_2) - \mathbf{L}(t_1) = \int_{t_1}^{t_2} (\mathbf{r} \times \mathbf{F}) dt = \int_{t_1}^{t_2} \mathbf{M} dt, \mathbf{r} \times \mathbf{v} = \mathbf{M} : \text{力のモーメント}$$

角運動量の変化は外力のモーメント(能率)の積に等しい

実際は微分形(⊙のほう)で使うことが多いかも…(今回はそう)

 $\mathbf{r} \times \mathbf{F} = 0$  になるとき(すなわち  $\mathbf{r}$  と  $\mathbf{F}$  の方向が等しいときなど) $\frac{d}{dt} \mathbf{L} = 0$ , すなわち  $\mathbf{L}$  が定ベクトルとなる。これを **角運動量保存則** と呼ぶ。

## (3) 運動エネルギーの時間変化と外力による仕事

$$K = \frac{m}{2} |\mathbf{v}|^2 : \text{運動エネルギー}$$

$$m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = \mathbf{F}$$

両辺に  $\mathbf{v}$  を内積する

$$m \mathbf{v} \cdot \frac{d\mathbf{v}}{dt} = \mathbf{F} \cdot \mathbf{v}$$

$$m \left( \frac{d}{dt} \frac{1}{2} \mathbf{v} \cdot \mathbf{v} \right) = \mathbf{F} \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt}$$

$$\frac{d}{dt} \left( \frac{m}{2} |\mathbf{v}|^2 \right) = \mathbf{F} \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt}$$

両辺で積分して

$$\int_{K(t_1)}^{K(t_2)} dK = \int_{t_1}^{t_2} \mathbf{F} \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt} dt = \int_{\mathbf{r}(t_1)}^{\mathbf{r}(t_2)} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} = W \equiv \text{仕事}$$

 $K = \frac{m}{2} |\mathbf{v}|^2$  を用いた

$$\therefore K(t_2) - K(t_1) = \int_{\mathbf{r}(t_1)}^{\mathbf{r}(t_2)} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}$$

$$K(t_2) - K(t_1) = \frac{m}{2} |\mathbf{v}(t_2)|^2 - \frac{m}{2} |\mathbf{v}(t_1)|^2 = \int_{\mathbf{r}(t_1)}^{\mathbf{r}(t_2)} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} : \text{仕事}$$

運動エネルギーの変化は外力の仕事に等しい

さて、ここではあえて外力による仕事が 0 のときに運動エネルギーが保存するとは言いません。理由としては、外力(ここでは重力などの保存力を含む)が無い物理現象を考える意味があまり無いことと、次の(4)で保存力のポテンシャルエネルギーを含めた総力学的エネルギー保存を扱うからです。

※(\*)について

厳密には(\*)のこころを自明として通り抜けてはいけません。しかし、 $= pV$  成立するのは事実なので、面倒ならこの※は飛ばしても構わない。

・外力のする仕事

$$W_{\text{外}} = \int_{t_a}^{t_b} F(t) \frac{d\mathbf{r}(t)}{dt} \cdot dt$$

$$= \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \sum_{i=0}^{N-1} F(t_i) \frac{d\mathbf{r}(t_i)}{dt} \Delta t \quad \left( \begin{array}{l} \Delta t = \frac{t_b - t_a}{N} \\ t_i = t_a + i\Delta t, \quad i = 0, 1, \dots, N \\ t_0 = t_a, \quad t_N = t_b \end{array} \right)$$

ここで、 $\frac{d\mathbf{r}(t_i)}{dt}$  は微少量なので、

$$\frac{d\mathbf{r}(t_i)}{dt} \approx \frac{\Delta \mathbf{r}_i}{\Delta t} + O(\Delta t) \quad (\text{極限に飛ばせば} \approx pV =)$$

よって

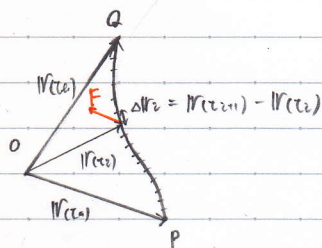
$$W_{\text{外}} = \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \sum_{i=0}^{N-1} F(t_i) \left( \frac{\Delta \mathbf{r}_i}{\Delta t} + O(\Delta t) \right) \Delta t$$

$$= \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \sum_{i=0}^{N-1} F(t_i) \Delta \mathbf{r}_i$$

$= [t_i, t_{i+1}]$  における仕事

$$= \int_{\mathbf{r}(t_a)}^{\mathbf{r}(t_b)} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}$$

これを **線積分** という



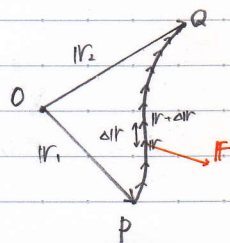
#### (4) 保存力とエネルギー保存則

右図で P から Q まで外力に抗して

(ほぼ同じ力をかけてゆっくり移動させる)

物体を移動するのに要する仕事を  $W'$  とする

$$W' = - \int_{P \rightarrow Q} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}$$



この  $W'$  が始点(P)と終点(Q)のみで決まり、途中の経路に依らない外力  $\mathbf{F}$  を **保存力** という(これが保存力の定義)

始点と終点のみで決まるわけ。各保存力に対してポテンシャルエネルギーを定義できる。

$$U(r) \equiv - \int_{r_0}^r F(r) \cdot dr \quad (F \text{ は力, } r_0 \text{ は基準点})$$

これを用いて表せば、基準点を0として、

$$W' = - \int_{r_1}^{r_2} F(r) \cdot dr = - \left\{ \int_0^{r_2} F(r) \cdot dr - \int_0^{r_1} F(r) \cdot dr \right\} \\ = U(r_2) - U(r_1) \quad (= \tilde{U}(r_1, r_2))$$

(本来は  $W'$  をこのように  $(r_2 \text{ の関数}) - (r_1 \text{ の関数})$  で表せるようなものを、ポテンシャルエネルギーと定義した、という順序だが、今は分かりやすいために順序を逆にした)

ここで、(3) より、 $F$  が保存力のときは、

$$K(t_2) - K(t_1) = \int_{t_1}^{t_2} F \cdot dr \\ = - (U(r_2) - U(r_1)) \\ = - \{ U(r_{t_2}) - U(r_{t_1}) \}$$

$$\therefore K(t_2) + U(r_{t_2}) = K(t_1) + U(r_{t_1})$$

すなわち、 $E = K + U = \frac{m}{2} |v|^2 + U(r)$  : 力学的エネルギーと定義すると、

$E$  は保存する

ことがわかる。

$$E = K + U = \frac{m}{2} |v|^2 + U(r) = \text{const. (一定)} : \text{力学的エネルギー}$$

$K$  : 運動エネルギー (kinetic energy),  $U$  : 位置エネルギー (potential energy)

力学的エネルギーは保存する (外力が保存力のとき)

## (5) 外力とポテンシャルエネルギーの関係

(4) で定義した式と(3)より、

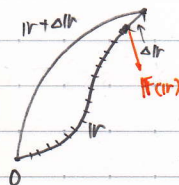
$$U(r) = - \int_{r_0}^r F(r) \cdot dr \\ = - \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=0}^{N-1} F(r_i) \Delta r_i$$

であった。そこで  $r + \Delta r$  で  $U(r + \Delta r)$  を定義すると、

$$U(r + \Delta r) - U(r) = - \int_r^{r + \Delta r} F(r) \cdot dr \\ = - F(r) \cdot \Delta r + O(\Delta r^2) \approx - F(r) \cdot \Delta r \quad \dots (1) \\ (\Delta r \text{ の間は } F(r) \text{ はほぼ一定とみなした } (\Delta r \rightarrow 0 \text{ のとき}))$$

一方、 $\Delta U = U(r + \Delta r) - U(r)$  とおくと、

$$\Delta U = U(r + \Delta r) - U(r) \\ = U(x + \Delta x, y + \Delta y, z + \Delta z) - U(x, y, z)$$



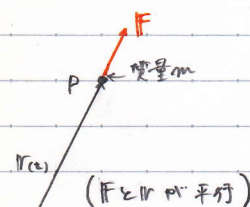


## 例題

位置  $\mathbf{r}$  に働く外力  $\mathbf{F}(\mathbf{r})$  が  
 $\mathbf{F}(\mathbf{r}) = F(|\mathbf{r}|) \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|}$  ← (これは  $F(r) \mathbf{e}_r$  と表せる  
 (こう書くと意味がわかりやすいかも))

と表されるとき、**中心力** と呼ぶ

( $F(|\mathbf{r}|)$  とは、 $F$  の大きさを  $|\mathbf{r}|$  のみで決まるということ)



(1) 質量  $m$  の物体が外力  $\mathbf{F}(\mathbf{r})$  のもとで  
 運動するとき、角運動量  $\mathbf{L}$  が保存することを示せ。

(2)  $F(|\mathbf{r}|) = k|\mathbf{r}|^\alpha$  のとき  $\mathbf{F}(\mathbf{r})$  は保存力であることを示せ。

また、このとき保存する力学的エネルギー  $E$  を求めよ。

## 解答

$$(1) m\ddot{\mathbf{r}} = \mathbf{F}(\mathbf{r}) = F(|\mathbf{r}|) \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|}$$

$$\mathbf{L} = \mathbf{r} \times m\dot{\mathbf{r}} \text{ より、} (\dot{\mathbf{r}} = \frac{d\mathbf{r}}{dt})$$

$$\frac{d}{dt} \mathbf{L} = m \frac{d\mathbf{r}}{dt} \times \frac{d\dot{\mathbf{r}}}{dt} + m \mathbf{r} \times \frac{d^2\mathbf{r}}{dt^2}$$

$$= m \mathbf{r} \times \frac{d^2\mathbf{r}}{dt^2}$$

$$= \mathbf{r} \times \mathbf{F}(\mathbf{r}) \leftarrow \text{ここまでは覚えておく}$$

$$= \mathbf{r} \times \left( F(|\mathbf{r}|) \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|} \right)$$

$$= \frac{F(|\mathbf{r}|)}{|\mathbf{r}|} \mathbf{r} \times \mathbf{r}$$

$$= 0$$

よって  $\mathbf{L}$  は一定、すなわち保存する。(ベクトルの向きと大きさが保存する)

(2) まず前準備として、

$$\mathbf{r} = x\mathbf{e}_x + y\mathbf{e}_y + z\mathbf{e}_z$$

$$\Delta\mathbf{r} = \Delta x\mathbf{e}_x + \Delta y\mathbf{e}_y + \Delta z\mathbf{e}_z$$

より、

$$\frac{\mathbf{r} \cdot \Delta\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|} = \frac{x\Delta x + y\Delta y + z\Delta z}{\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}}$$

ここで、

$$\Delta(r^2) = (\mathbf{r} + \Delta\mathbf{r})^2 - r^2 = 2\mathbf{r} \cdot \Delta\mathbf{r} + (\Delta\mathbf{r})^2 \cong 2\mathbf{r} \cdot \Delta\mathbf{r}$$

$$\Delta(r^2) = \Delta(x^2 + y^2 + z^2) \cong (x + \Delta x)^2 + (y + \Delta y)^2 + (z + \Delta z)^2 - (x^2 + y^2 + z^2)$$

$$\begin{aligned} &= 2x\Delta x + 2y\Delta y + 2z\Delta z + \{(\Delta x)^2 + (\Delta y)^2 + (\Delta z)^2\} \\ &\cong 2(x\Delta x + y\Delta y + z\Delta z) \end{aligned}$$

これより、 $x\Delta x + y\Delta y + z\Delta z \cong \mathbf{r} \cdot \Delta\mathbf{r}$  ( $\Delta\mathbf{r}$  が十分に小さいとき)

従って、

$$\frac{|\mathbf{r}| \cdot d|\mathbf{r}|}{|\mathbf{r}|} = \frac{x \Delta x + y \Delta y + z \Delta z}{r} \approx \frac{r \Delta r}{r} = \Delta r$$

$$\therefore \frac{|\mathbf{r}|}{|\mathbf{r}|} d|\mathbf{r}| = d|\mathbf{r}| \dots \textcircled{1}$$

本題に戻ると、2点P, Q間を外力に抗して動かす仕事を考えると、

$$W' = - \int_{r_p}^{r_q} F(r) \cdot d|\mathbf{r}|$$

$$= - \int_{r_p}^{r_q} F(r) \frac{|\mathbf{r}|}{|\mathbf{r}|} d|\mathbf{r}|$$

$$= - \int_{r_p}^{r_q} F(r) dr \quad (\because \textcircled{1})$$

$$= - \int_{r_p}^{r_q} k r^{\alpha} dr$$

$$= - \left[ \frac{k}{\alpha+1} r^{\alpha+1} \right]_{r_p}^{r_q}$$

$$= - \frac{k}{\alpha+1} \{ (r_q)^{\alpha+1} - (r_p)^{\alpha+1} \}$$

$$= - \frac{k}{\alpha+1} \{ |\mathbf{r}_q|^{\alpha+1} - |\mathbf{r}_p|^{\alpha+1} \}$$

よって  $W'$  は始点と終点の位置ベクトルのみによって定まる  
( $r_p$  と  $r_q$  のみの関数) ので、 $F(r)$  は保存力である。

そこで、

$$U(r) = - \frac{k}{\alpha+1} |\mathbf{r}|^{\alpha+1}$$

と取れば、

$$W' = U(r_q) - U(r_p)$$

一方で、

$$m \ddot{\mathbf{r}} = F(r)$$

$$\therefore m \mathbf{v} \cdot \frac{d\mathbf{v}}{dt} = F(r) \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt}$$

$$\therefore \frac{d}{dt} \left( \frac{m}{2} |\mathbf{v}|^2 \right) = F(r) \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt}$$

$$\therefore K(r_q) - K(r_p) = \int_{r_p}^{r_q} F(r) dr = -W' \quad (K(r) = \frac{m}{2} |\mathbf{v}|^2 = \frac{m}{2} |\dot{\mathbf{r}}|^2 \text{ と定義した})$$

より、

$$U(r_q) - U(r_p) = K(r_p) - K(r_q)$$

$$\therefore U(r_q) + K(r_q) = U(r_p) + K(r_p) = \text{const.} = E \text{ (保存)}$$

従って、

$$E = \frac{m}{2} |\mathbf{v}|^2 - \frac{k}{\alpha+1} |\mathbf{r}|^{\alpha+1} \dots \left( \frac{\text{答}}{\text{答}} \right)$$

※補足(授業範囲外なので飛ばすの可?)

rot という記号 (rotation) を次のように定義する

$$\text{rot } A = \nabla \times A$$

F が保存力 のとき

$$\text{rot } F = \nabla \times F$$

$$= \begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \\ \frac{\partial}{\partial y} \\ \frac{\partial}{\partial z} \end{pmatrix} \times \begin{pmatrix} F_x \\ F_y \\ F_z \end{pmatrix}$$
$$= \begin{pmatrix} \frac{\partial F_z}{\partial y} - \frac{\partial F_y}{\partial z} \\ \frac{\partial F_x}{\partial z} - \frac{\partial F_z}{\partial x} \\ \frac{\partial F_y}{\partial x} - \frac{\partial F_x}{\partial y} \end{pmatrix}$$

$$= 0$$

$$\left( \begin{array}{l} \because F \text{ が保存力 なら } \\ F = - \begin{pmatrix} \frac{\partial U}{\partial x} \\ \frac{\partial U}{\partial y} \\ \frac{\partial U}{\partial z} \end{pmatrix} \end{array} \right. \begin{array}{l} \leftarrow x \text{ の関数} \\ \leftarrow y \text{ の関数} \\ \leftarrow z \text{ の関数} \end{array} \right)$$

なので、本来これを示せば F が保存力の証明となる。

## 2. 運動の解析

### 2-0. 極座標を用いた運動方程式

今までの運動方程式はxyz座標空間で表現していた。  
これを極座標を用いて表してみる。(中心力の場合)

・(例えは)中心力扱うなら.

$$F = F(r) \frac{\mathbf{r}}{r} \quad (r = |\mathbf{r}|)$$

こういう力の場合r自身が座標の1つになっている方が圧倒的に便利なので、極座標を用いるのがよい。

$\{r, \theta, \varphi\}$  と  $\{x, y, z\}$  (右図参照)

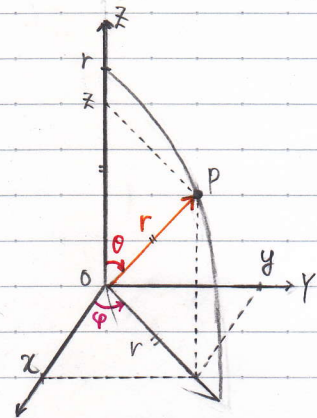
に対応させると、

$$r = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2}$$

$$\begin{cases} x = r \sin \theta \sin \varphi \\ y = r \sin \theta \cos \varphi \\ z = r \cos \theta \end{cases}$$

(図を見ればすぐ分かるはず)

( $0 \leq \theta \leq \pi$ ,  $0 \leq \varphi < 2\pi$ )



次に  $\{e_r, e_\theta, e_\varphi\}$  と  $\{e_x, e_y, e_z\}$  を用いて表す

$\Delta \mathbf{r} = \Delta x e_x + \Delta y e_y + \Delta z e_z$  であつたのと同様に、

少しずらして考えると、 $(r, \theta, \varphi \rightarrow r + \Delta r, \theta + \Delta \theta, \varphi + \Delta \varphi)$

右下図のようになる。

==T. 図より.

$e_r, e_\theta, e_\varphi$  は  $\mathbf{r}$  に依存する, すなわち  $\mathbf{r}$  に依存する

==> に注意しておく

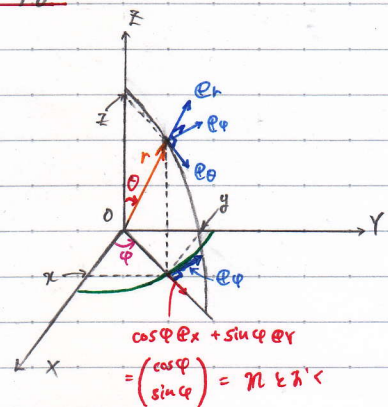
まず、

$$\begin{aligned} e_r = \frac{\mathbf{r}}{r} &= \frac{z}{r} e_z + \frac{y}{r} e_y + \frac{x}{r} e_x \\ &= \sin \theta \sin \varphi e_x + \sin \theta \cos \varphi e_y + \cos \theta e_z \end{aligned}$$

次に

$e_\varphi$  は  $n \pi/2$  回転させたものなので、

$$\begin{aligned} e_\varphi &= \begin{pmatrix} \cos \frac{\pi}{2} & -\sin \frac{\pi}{2} \\ \sin \frac{\pi}{2} & \cos \frac{\pi}{2} \end{pmatrix} n \\ &= \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \varphi \\ \sin \varphi \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\sin \varphi \\ \cos \varphi \end{pmatrix} \\ &= -\sin \varphi e_x + \cos \varphi e_y \end{aligned}$$



さらに、 $\mathbf{e}_\theta$  は  $\mathbf{e}_r$  と  $\mathbf{e}_\varphi$  に垂直なので、右ネジに注意すると、

$$\begin{aligned}\mathbf{e}_\theta &= \mathbf{e}_\varphi \times \mathbf{e}_r \\ &= \begin{pmatrix} \cos\theta \cos\varphi \\ \cos\theta \sin\varphi \\ -\sin\theta \end{pmatrix} = \cos\theta \cos\varphi \mathbf{e}_x + \cos\theta \sin\varphi \mathbf{e}_y - \sin\theta \mathbf{e}_z\end{aligned}$$

ただし、 $\mathbf{e}_\varphi = -\sin\varphi \mathbf{e}_x + \cos\varphi \mathbf{e}_y + 0 \mathbf{e}_z$  とした。

以上まとめると、

$$\begin{cases} \mathbf{e}_r = \sin\theta \cos\varphi \mathbf{e}_x + \sin\theta \sin\varphi \mathbf{e}_y + \cos\theta \mathbf{e}_z \\ \mathbf{e}_\theta = \cos\theta \cos\varphi \mathbf{e}_x + \cos\theta \sin\varphi \mathbf{e}_y - \sin\theta \mathbf{e}_z \\ \mathbf{e}_\varphi = -\sin\varphi \mathbf{e}_x + \cos\varphi \mathbf{e}_y \end{cases}$$

今度は  $\mathbf{r}, \mathbf{v} = \dot{\mathbf{r}}, \mathbf{a} = \ddot{\mathbf{r}} \in \mathbf{e}_r, \mathbf{e}_\theta, \mathbf{e}_\varphi$  を用いて表す

まず、その前に  $\dot{\mathbf{e}}_r, \dot{\mathbf{e}}_\theta, \dot{\mathbf{e}}_\varphi \in \mathbf{e}_r, \mathbf{e}_\theta, \mathbf{e}_\varphi$  を用いて表す

$$\begin{cases} \dot{\mathbf{e}}_r = \cos\theta \cdot \dot{\theta} (\cos\varphi \mathbf{e}_x + \sin\varphi \mathbf{e}_y) - \sin\theta (\sin\varphi \cdot \dot{\varphi} \mathbf{e}_x - \cos\varphi \cdot \dot{\varphi} \mathbf{e}_y) \\ \quad - \sin\theta \cdot \dot{\theta} \mathbf{e}_z \\ \quad = \dots = \dot{\theta} \mathbf{e}_\theta + \sin\theta \cdot \dot{\varphi} \mathbf{e}_\varphi \\ \dot{\mathbf{e}}_\theta = \dots = -\dot{\theta} \mathbf{e}_r + \dot{\varphi} \cos\theta \mathbf{e}_\varphi \\ \dot{\mathbf{e}}_\varphi = \dots = -\dot{\varphi} (\sin\theta \mathbf{e}_r + \cos\theta \mathbf{e}_\theta) \end{cases}$$

さて、準備が出来たので、 $\mathbf{r}, \mathbf{v}, \mathbf{a} \in \mathbf{e}_r, \mathbf{e}_\theta, \mathbf{e}_\varphi$  を用いて表す

$$\mathbf{r} = r \mathbf{e}_r$$

$$\begin{aligned}\mathbf{v} = \dot{\mathbf{r}} &= \dot{r} \mathbf{e}_r + r \dot{\mathbf{e}}_r = \dot{r} \mathbf{e}_r + r \dot{\theta} \mathbf{e}_\theta + r \sin\theta \cdot \dot{\varphi} \mathbf{e}_\varphi \\ &\equiv \underline{v_r \mathbf{e}_r + v_\theta \mathbf{e}_\theta + v_\varphi \mathbf{e}_\varphi}\end{aligned}$$

$$\mathbf{a} = \ddot{\mathbf{r}}$$

$$= \dot{\mathbf{v}}$$

$$\begin{aligned} &= \dots = \underline{(\ddot{r} - r\dot{\theta}^2 - r\sin^2\theta \dot{\varphi}^2) \mathbf{e}_r + (2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta} - r\sin\theta \cos\theta \dot{\varphi}^2) \mathbf{e}_\theta} \\ &\quad + \underline{(2\dot{r}\dot{\varphi} \sin\theta + 2r\dot{\theta}\dot{\varphi} \cos\theta + r\ddot{\varphi} \sin\theta) \mathbf{e}_\varphi} \\ &\equiv \underline{a_r \mathbf{e}_r + a_\theta \mathbf{e}_\theta + a_\varphi \mathbf{e}_\varphi} \end{aligned}$$

(同じ色が同じもの)

以上準備が整った。中心力下の運動方程式をこれらを用いて表す。

まず、 $F(r)$  を中心力とすると、

$$F(r) = F(r) \frac{\mathbf{r}}{r} \quad (\text{中心力の定義})$$

このとき、〈例題〉(1)より、 $\mathbf{F}$  が中心力なら  $\mathbf{L} = m(\mathbf{r} \times \mathbf{v})$  が一定なので、

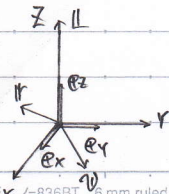
$\mathbf{L} = |\mathbf{L}| \mathbf{e}_z$  となるように  $\{\mathbf{e}_x, \mathbf{e}_y, \mathbf{e}_z\}$  をとることが出来る

$\mathbf{L}$  が一定ということは、 $\mathbf{L}$  に垂直な平面、すなわち、

$\mathbf{r}$  と  $\mathbf{v}$  で張られる平面は一定なので、物体の運動は

この平面上に限られる。いま、 $\mathbf{L}$  と  $\mathbf{e}_z$  は平行なので、この平面とは

$XY$  平面である。(運動を3次元から2次元に落とす)



よって、極座標においても  $\theta = \frac{\pi}{2}$  で一定としてよい。

(XY平面上のみでの運動しないと定めたので、 $\theta = \frac{\pi}{2}$ ,  $\dot{\theta} = 0$ ,  $\ddot{\theta} = 0$ )  
としても一般性を失わない、ということ

よって、

$$\begin{cases} x = r \sin \varphi \\ y = r \cos \varphi \end{cases}$$

$$\begin{cases} v_r = \dot{r} \\ v_\varphi = r\dot{\varphi} \end{cases}$$

$$\begin{cases} a_r = \ddot{r} - r\dot{\varphi}^2 \\ a_\varphi = 0 \end{cases}$$

$$a_\varphi = 2\dot{r}\dot{\varphi} + r\ddot{\varphi} = \frac{1}{r}(2r\dot{r}\dot{\varphi} + r^2\ddot{\varphi}) = \frac{1}{r}\frac{d}{dt}(r^2\dot{\varphi})$$

より、

$$\begin{cases} \mathbf{r} = r\mathbf{e}_r \\ \dot{\mathbf{r}} = \dot{r}\mathbf{e}_r + r\dot{\varphi}\mathbf{e}_\varphi \\ \ddot{\mathbf{r}} = (\ddot{r} - r\dot{\varphi}^2)\mathbf{e}_r + \frac{1}{r}\frac{d}{dt}(r^2\dot{\varphi})\mathbf{e}_\varphi \end{cases}$$

このとき、

$$\begin{aligned} \mathbf{L} &= m(\mathbf{r} \times \dot{\mathbf{r}}) = m\{r\mathbf{e}_r \times (\dot{r}\mathbf{e}_r + r\dot{\varphi}\mathbf{e}_\varphi)\} \\ &= m r^2\dot{\varphi}\mathbf{e}_z \quad (\theta = \frac{\pi}{2} \text{ より } \mathbf{e}_\theta = \mathbf{e}_\varphi \times \mathbf{e}_r = -\mathbf{e}_z) \end{aligned}$$

また、 $\mathbf{L}$  は  $\mathbf{e}_z$  と平行なので、

$\mathbf{L} = |\mathbf{L}|\mathbf{e}_z$  と表した。  $|\mathbf{L}| = L$  とおくと、

$$L = m r^2\dot{\varphi} \quad \therefore r^2\dot{\varphi} = \frac{L}{m} \quad \cdots \textcircled{1}$$

以上から、XY平面での極座標の運動方程式は、

$$m\ddot{\mathbf{r}} = \mathbf{F}(r)$$

$$\therefore m(\ddot{r} - r\dot{\varphi}^2)\mathbf{e}_r + \frac{m}{r}\frac{d}{dt}(r^2\dot{\varphi})\mathbf{e}_\varphi = F(r)\mathbf{e}_r$$

$\mathbf{e}_r$  と  $\mathbf{e}_\varphi$  は 1次独立なので、

$$\begin{cases} m(\ddot{r} - r\dot{\varphi}^2) = F(r) & \cdots \textcircled{2} \\ \frac{m}{r}\frac{d}{dt}(r^2\dot{\varphi}) = 0 & \cdots \textcircled{3} \end{cases}$$

③より、 $r^2\dot{\varphi} = \text{一定} = h$  とおく (今は  $h$  は定数)  $\cdots \textcircled{4}$

(これと①より、 $\frac{L}{m} = \text{一定} \quad \therefore L = \text{一定}$  (角運動量保存))

④より、 $\dot{\varphi} = \frac{h}{r^2}$  なので、これを②に代入して、

$$m\left(\ddot{r} - \frac{h^2}{r^3}\right) = F(r)$$

$$m\ddot{r} = \frac{m h^2}{r^3} + F(r) \quad r = r(t) \text{ についてのみの二階微分方程式になった!!}$$

(もし、この式が解けて、 $r = r(t)$  が具体的な  $t$  の関数として表せたなら、 $\dot{\varphi} = \frac{h}{r^2}$  より、 $\varphi = \varphi(t)$  も具体的な  $t$  の関数として表せる。すなわち、運動を時間追跡できる!)

物理学として  
大事なところ

もし、 $F$  が保存力なら、

$$U(r) = -\int_{r_0}^r F(r) dr \text{ より } \frac{d}{dr} U(r) = -F(r)$$

$$\therefore m\ddot{r} = \frac{mh^2}{r^3} - \frac{d}{dr} U(r) = \frac{d}{dr} \left( -\frac{mh^2}{2} \frac{1}{r} \right) - \frac{d}{dr} U(r) = -\frac{d}{dr} \left( \frac{mh^2}{2} \frac{1}{r} + U(r) \right)$$

$$\text{両辺に } \dot{r} = \frac{dr}{dt} \text{ をかけ、}$$

$$m\dot{r}\ddot{r} = -\frac{dr}{dt} \cdot \frac{d}{dr} \left( \frac{mh^2}{2} \frac{1}{r} + U(r) \right)$$

$$\frac{d}{dt} \left( \frac{m}{2} \dot{r}^2 \right) = -\frac{d}{dt} \left( \frac{mh^2}{2} \frac{1}{r} + U(r) \right)$$

$$\therefore \frac{d}{dt} \left( \frac{m}{2} \dot{r}^2 + \frac{mh^2}{2} \frac{1}{r} + U(r) \right) = 0$$

$$\therefore \frac{m}{2} \dot{r}^2 + \frac{mh^2}{2} \frac{1}{r} + U(r) = \text{const.} = E_r \text{ (保存量) とおく}$$

$$\therefore E_r = \frac{m}{2} (\dot{r}^2 + \frac{h^2}{r^2}) + U(r)$$

これは、

$$\dot{r} = f(r, E_r, L) \quad (\dot{r} \text{ は } r, E_r, L \text{ の関数 ということ})$$

となり、いま  $E_r$  と  $L$  が一定より、

$$\dot{r} = (r \text{ のみの関数}) \quad (\text{これについての1階微分方程式})$$

となった。(より簡単に時間追跡出来るようになった!!)

## 2-1. 天体(惑星)の運動、ケプラーの法則と万有引力

この節では、ケプラーの法則の成立を前提とし、天体の運動を解析する。

・ケプラーの3法則 (これらはティコブラーエの観測データを基に、ケプラーが見出した)

第1: 惑星は太陽を焦点の1つとする楕円軌道を描く。

第2: 太陽と惑星を結ぶ直線分(動径)が単位時間あたりに掃く面積は一定である(面積速度が一定)。

第3: 惑星が太陽のまわりを回る周期の2乗は、楕円軌道の長半径の3乗に比例する。(しかも、比例定数は惑星に依らず一定)

・楕円について、

$$\frac{x^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} = 1 \quad (a > b \text{ とする})$$

$$\text{焦点 } F(c, 0) \text{ と } F'(-c, 0)$$

$$\text{また、} c \equiv \sqrt{a^2 - b^2}$$

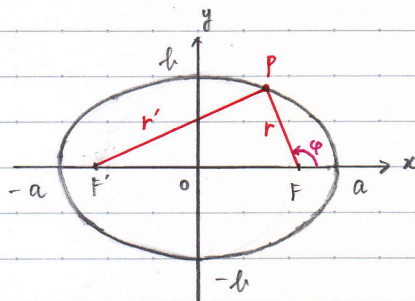
$$FP + F'P = 2a \quad (\text{楕円の定義})$$

$$\text{また、} e \equiv \frac{c}{a} \quad (\text{離心率}),$$

$$\frac{b}{a} \equiv l$$

と定義しておく。(後で使う)

( $e$  と  $l$  は  $a, b, c$  によって定まるので、各楕円における定数)



極は焦点F

いま、 $P(r, \varphi)$  とし、極座標で考える。このとき  $r'$  は  $r$  と  $\varphi$  で定まり、

$$r'^2 = (2c + r \cos \varphi)^2 + (r \sin \varphi)^2$$

$$= 4c^2 + 4cr \cos \varphi + r^2 \quad \dots ①$$

-  $\rho$  定義より、

$$r + r' = 2a \quad \therefore r'^2 = (r - 2a)^2 \quad \dots ②$$

①, ②より、

$$4c^2 + 4cr \cos \varphi + r^2 = r^2 - 4ar + 4a^2$$

$$\therefore r = \frac{b^2}{a + c \cos \varphi} = \frac{b^2}{a} \cdot \frac{1}{1 + \frac{c}{a} \cos \varphi} = \frac{b^2}{1 + e \cos \varphi}$$

(これにより、 $b$  は  $\varphi = \frac{\pi}{2}$  のときの  $r$  値と  $\rho$  の値)

$$\therefore r = \frac{b^2}{1 + e \cos \varphi} \quad (\text{楕円の極座標式表示})$$

また、皆さん御存じの通り、楕円はパラメータ  $\theta$  を用いて媒介変数表示をすることから出来る

$$\begin{cases} x = a \cos \theta \\ y = b \sin \theta \end{cases} \quad (0 \leq \theta < 2\pi) \quad (\theta + \varphi = \text{注意})$$

==&gt;

$$r^2 = (x - c)^2 + y^2$$

$$= (a \cos \theta - c)^2 + (b \sin \theta)^2$$

$$= \dots = (a - c \cos \theta)^2 \quad (\because b^2 = a^2 - c^2)$$

$$\therefore r = a - c \cos \theta \quad (> 0)$$

$$= a(1 - e \cos \theta)$$

$$\therefore r = a(1 - e \cos \theta) \quad \left( \theta \text{ の図形的意味は高校数学で既習のはずなので省くが、直感的にはわかりにくいので、媒介変数として受け入れよう} \right)$$

・面積速度について、

 $t \rightarrow t + \Delta t$  の間に軌径の掃く面積を  $\Delta S$  とすると、

$$\Delta S \approx \frac{1}{2} r \cdot r \Delta \varphi \quad (\Delta t \rightarrow 0 \text{ なら } \Delta \varphi \approx r \dot{\varphi} \Delta t)$$

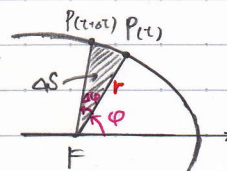
よって、面積速度は、

$$\frac{dS}{dt} = \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{\Delta S}{\Delta t} = \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{1}{2} r^2 \frac{\Delta \varphi}{\Delta t} = \frac{1}{2} r^2 \frac{d\varphi}{dt} = \frac{1}{2} r^2 \dot{\varphi}$$

従って面積速度を

$$\boxed{\frac{dS}{dt} \equiv \frac{1}{2} r^2 \dot{\varphi}}$$

と定義出来る。



$$\left( \begin{array}{l} \frac{1}{2} r^2 \dot{\varphi} \text{ とは左の斜線部の面積であり、これは、} \\ \frac{dS}{dt} = \frac{1}{2} |r| |\dot{r}| \sin(\pi - \theta) = \frac{1}{2} |r| |\dot{r}| \sin \theta = \frac{1}{2} |r \times \dot{r}| \\ \text{である} \end{array} \right)$$

$\frac{dS_{\text{cl}}}{dt} = \frac{1}{2} r^2 \dot{\phi} = \text{一定のはずなので. (ケプラー第2法則)}$  2次元極座標で考えると.

$$\mathbf{r} = r \mathbf{e}_r, \quad \dot{\mathbf{r}} = \dot{r} \mathbf{e}_r + r \dot{\phi} \mathbf{e}_\phi \text{ より.}$$

$$\mathbf{L} = m(\mathbf{r} \times \dot{\mathbf{r}}) = m r^2 \dot{\phi} \mathbf{e}_z \therefore L = m r^2 \dot{\phi} \quad \therefore r^2 \dot{\phi} = \frac{L}{m} \quad (\mathbf{e}_z \text{ は一定})$$

いま、 $\frac{1}{2} r^2 \dot{\phi} = \frac{L}{2m}$  一定のはずなので.

$L$  も一定ということになる。

すなわち  $L$  は一定  $\rightarrow$  角運動量が保存しているのだから、中心力が存在しているのであろう。

・ケプラー第3法則成立からの考察

いま、 $r^2 \dot{\phi} = \text{一定} \equiv h$  とおくと、(すなわち  $h$  は定数)

$$\dot{S} = \frac{dS_{\text{cl}}}{dt} = \frac{1}{2} r^2 \dot{\phi} = \frac{h}{2}$$

一周期を  $T$  とおくと、 $\dot{S} \cdot T = (\text{楕円の面積})$  なので.

$$T = \frac{\pi a b h}{\dot{S}} = \frac{2\pi a b h}{h}$$

従って.

$$\frac{a^3}{T^2} = \frac{h^2 a^3}{4\pi^2 a^2 b^2} = \frac{1}{4\pi^2} \cdot \frac{h^2}{\frac{b^2}{a^2}} = \frac{1}{4\pi^2} \cdot \frac{h^2}{l} = \text{惑星に依らず一定}$$

すなわち  $\frac{h^2}{l}$  は 惑星に依らない定数 となる。

・惑星の加速度からの考察

もし、運動を構成している 力 が 中心力 だとしたら、惑星の加速度は

$$\ddot{\mathbf{r}} = \underbrace{(\ddot{r} - r\dot{\phi}^2)}_{\text{radial}} \mathbf{e}_r + \underbrace{\frac{1}{r} \frac{d}{dt}(r^2 \dot{\phi})}_{\text{angular}} \mathbf{e}_\phi$$

いま、 $r^2 \dot{\phi} = \text{const.}$  なので.

$$a_\phi = \frac{1}{r} \frac{d}{dt}(r^2 \dot{\phi}) = 0$$

(従って  $\ddot{\mathbf{r}} = a_r \mathbf{e}_r$  とわかる。これは 加速度は太陽の方向 であることを意味する。  
すなわち、運動方程式を考えれば、力も太陽の方向(向きは不明) である  
ことがわかる。これは 力が中心力である ことの裏付けとなる。)

$$r^2 \dot{\phi} = h \text{ より.}$$

$$a_r = \ddot{r} - r\dot{\phi}^2 = \ddot{r} - \frac{h^2}{r^3}$$

ここでケプラー第1法則より、 $r = \frac{l}{1 + E \cos \phi}$  があるので.

$$\begin{cases} \dot{r} = -\frac{l}{(1 + E \cos \phi)^2} \cdot E(-\sin \phi) \dot{\phi} = \frac{h}{l} E \sin \phi \\ \ddot{r} = \frac{h}{l} E \cos \phi \cdot \dot{\phi} = \frac{h}{l} \left( \frac{l}{r} - 1 \right) \frac{h}{r^2} = \frac{h^2}{r^3} - \frac{h^2}{l r} \end{cases}$$

であるから.

$$a_r = \ddot{r} - \frac{h^2}{r^3} = -\left(\frac{h^2}{l}\right) \frac{1}{r^2}$$

↑  
つまり、これは惑星に依らない定数  $\frac{h^2}{l}$  だ。

従って.

$$m\ddot{r} = -m\frac{h^2}{r^3} \hat{e}_r$$

$$\therefore \underline{F = -m\frac{h^2}{r^3} \hat{e}_r}$$

ニミテ少し考える。質量  $m$  の惑星が太陽によって及ぼされる外力  $F$  は、 $m$  に比例している。 ニュートン第3法則より、この力  $F$  にも反作用の力  $-F$  が存在し、作用・反作用の関係から、質量  $M$  の太陽が惑星によって及ぼされる力は  $-F$  であり、これは  $M$  に比例しているはず。

$m$  と  $\frac{1}{r^3}$  は各惑星に依存する値なので、是が  $M$  に比例するに違いない。

この比例定数を  $G$  とすれば、( $G$  は  $M$  や  $m$  に依らないとする。)

$$\frac{h^2}{r^3} = GM$$

と書く。

$$\underline{F = -G\frac{Mm}{r^2} \hat{e}_r}$$

と書ける。

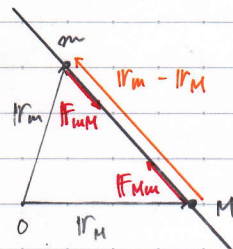
さらに中心力であることを考えれば、太陽の位置ベクトルを  $\mathbf{r}_M$ 、惑星の位置ベクトルを  $\mathbf{r}_m$  とし、

$$\underline{F = -G\frac{Mm}{r^2} \hat{e}_r = -G\frac{Mm}{|\mathbf{r}_m - \mathbf{r}_M|^2} \frac{\mathbf{r}_m - \mathbf{r}_M}{|\mathbf{r}_m - \mathbf{r}_M|}}$$

( $F_{\text{sun}}$ )

これは実際にはどんな2物体間にも働く力であり、

万有引力 と呼ばれる。



## 2-1\* 大きさのある物体の質点近似

ニュートンはプリンキピアを刊行するにあたって、ある1つのことに気がかりで1年延長してしまったらしい。それがこの「大きさのある物体を質点と見なしてよいのか」である。実際に見ていくことにする。

まず、万有引力は中心力、逆2乗則の保存力であるから、

$$\underline{U(r) = -G\frac{Mm}{r}} \quad (\text{基準は } |\mathbf{r}_0| \rightarrow \infty)$$

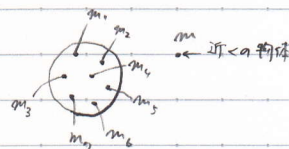
地球を半径  $R_0$ 、密度一様  $\rho$  の球体  $T$  として、(質量は  $M$ )

$$\underline{M = \frac{4}{3}\pi R_0^3 \rho}$$

次に、物体が各微小点の合成体と考えると、

万有引力  $F(r)$  は、この各点との力の合力と考えられ、

$$\underline{F(r) = \sum_{i=1}^N -Gm m_i \frac{(\mathbf{r} - \mathbf{r}_i)}{|\mathbf{r} - \mathbf{r}_i|^3}}$$



従って

$$U(r) = - \int_{r_0}^r F(r) \cdot dr$$

$$= \sum_{i=1}^N \int_{r_0}^r G m m_i \frac{(r - r_i)}{|r - r_i|^3} \cdot dr = \sum_{i=1}^N \left\{ -G \frac{m m_i}{|r - r_i|} \right\}$$

実際は質量が一様に連続的に分布している(と仮定している)ので

$$U(r) = - \int_V G \frac{m \rho(r') dV'}{|r - r'|}$$

と表せる。

※ 各点の万有引力は。(見やすいように近物体の質量  $m$  と  $G$  を省く)

$$dF = \frac{G m \rho(r') dV'}{|r - r'|^2} = \rho(r') dV' \frac{(r - r')}{|r - r'|^3} = \rho(r') (dV')^3 \frac{(r - r')}{|r - r'|^3}$$

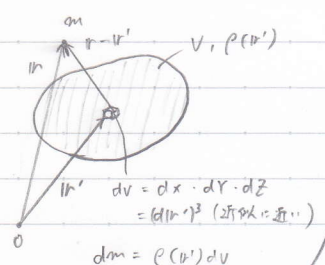
この力のポテンシャルエネルギーは。(= $\rho$  と  $G$  と  $m$  を書く)

$$U = - \int_{r_0}^r F \cdot dr = - G m \rho(r') (dV')^3 \cdot \frac{1}{|r - r'|}$$

これを無限個集めるので

$$U(r) = - \int_V G \frac{m \rho(r') dV'}{|r - r'|}$$

となる。



さて、実際に地球を考えてみよう。

半径  $R$ 、幅  $dR$  の球殻を考える(  $R$  は固定,  $\theta \in [0, \pi)$ ,  $\phi \in [0, 2\pi)$  ) $\{x, y, z\} \Rightarrow \{R, \theta, \phi\}$  に変換

$$dV = dx dy dz = dR \cdot R d\theta \cdot R \sin\theta d\phi$$

または

$$S = \sqrt{(r - R \cos\theta)^2 + (R \sin\theta)^2}$$

$$= \sqrt{r^2 + R^2 - 2Rr \cos\theta}$$

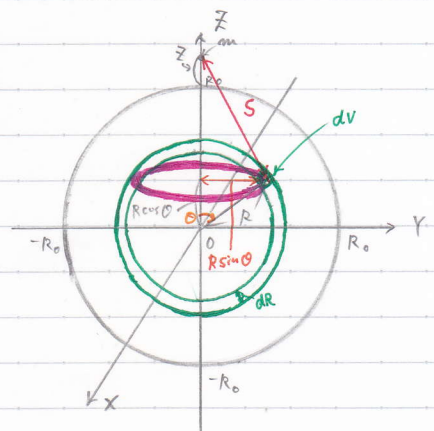
=  $S$  を用いて積分する

$$\begin{array}{c} \text{φの積分} \rightarrow \text{θの積分} \rightarrow \text{Rの積分} \rightarrow \text{球} \\ \uparrow \\ dV \end{array} \quad \begin{array}{c} \text{球殻} \\ \text{(球殻)} \end{array}$$

$$U(r) = - \int_V \frac{G m \rho}{S} dV \quad \left( \rho = \frac{M}{\frac{4}{3} \pi R_0^3} \right)$$

$$= - \int_0^{R_0} dR \int_0^\pi d\theta \int_0^{2\pi} \frac{G m \rho}{S} R^2 \sin\theta d\phi$$

$$= - \frac{2\pi}{\uparrow \text{(φの積分)}} \int_0^\pi \frac{G m \rho}{S} R^2 \sin\theta d\theta$$



$\therefore \tau: \theta \rightarrow s$  へ置換可。.

$$s = \sqrt{r^2 + R^2 - 2rR \cos \theta}$$

$$\frac{ds}{d\theta} = \frac{1}{2} \frac{-2Rr(-\sin \theta)}{\sqrt{r^2 + R^2 - 2rR \cos \theta}} = \frac{Rr}{s} \sin \theta \quad \begin{array}{c|c} 0 & 0 \rightarrow \pi \\ s & R+R \rightarrow r+R \end{array}$$

$$\therefore d\theta = \frac{s}{Rr \sin \theta} ds$$

従って.

$$U(r) = -2\pi \int_0^{R_0} dR \int_{r-R}^{r+R} \frac{Gm\rho}{s} R^2 \sin \theta \cdot \frac{s}{Rr \sin \theta} ds$$

$$= -2\pi \int_0^{R_0} dR \int_{r-R}^{r+R} \frac{Gm\rho R}{r} ds$$

$$= -2\pi \int_0^{R_0} \frac{2Gm\rho R^2}{r} dR$$

$$= -\frac{2\pi Gm\rho}{r} \left[ \frac{2}{3} R^3 \right]_0^{R_0}$$

$$= -\frac{Gm}{r} \rho \cdot \frac{4}{3} \pi R_0^3$$

$$= -G \frac{Mm}{r}$$

$$\therefore U(r) = -G \frac{Mm}{r}$$

となった。これは、中心に全質量が集中していると考えても良い、ということ、  
すなわち、質点とみなして良いことになる。

これを用いて、地球表面上の重力は、どう表すのかを考察する。

$|z| \ll R_0$  とし。

$$U(r) = -\frac{GMm}{R_0 + z} = -\frac{GMm}{R_0(1 + \frac{z}{R_0})} = -\frac{GMm}{R_0} \left(1 + \frac{z}{R_0}\right)^{-1}$$

$$\approx -\frac{GMm}{R_0} \left(1 - \frac{z}{R_0}\right) = -\frac{GMm}{R_0} + \frac{GMm}{R_0^2} z$$

↑ 片側だけ → PR のホウシはホウシ ← 一方 S  
PQ 間の力の和は 0 → PQ を引いたもの

$$\therefore U(z) \approx m \left( \frac{GM}{R_0^2} \right) z \quad (z \text{ に比例するのだから! それこそ力は一定だ!})$$

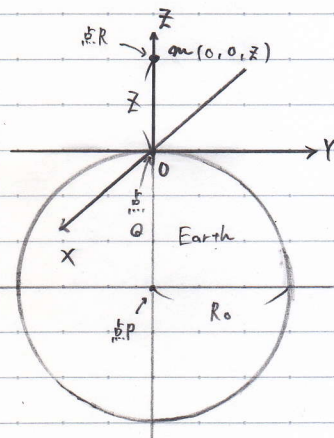
$$= mgz$$

$$\therefore \text{F.T.L.} \quad g \equiv \frac{GM}{R_0^2}$$

従って.

$$F = -\nabla U$$

$$\therefore F_z = -\frac{d}{dz} U(z) = -mg$$



## 2-2. 万有引力による天体の運動

この節では万有引力が存在するということを前提として、運動を解析する。

- 太陽の位置を0とすると、万有引力は、( $M$ が太陽の質量、 $m$ が惑星の質量)

$$F(r) = -G \frac{Mm}{r^2} \left( \frac{r}{r} \right) \dots (A) \quad (\text{中心力かつ保存力})$$

中心力なので、 $L$ は保存し、 $L = L e_z$  となるように直交系  $\{e_x, e_r, e_z\}$  をとると、惑星の運動はXY平面内に限られる。

そこで、XY平面内での2次元極座標で考える。 $(r, \phi, z) \{e_r, e_\phi, e_z\}$

( $r, \dot{r}, \ddot{r}$  の  $e_r, e_\phi$  表記は前やったので略する)

(A)より、運動方程式は、

$$m \left\{ (\ddot{r} - r\dot{\phi}^2) e_r + \frac{1}{r} \frac{d}{dt} (r^2 \dot{\phi}) e_\phi \right\} = -G \frac{Mm}{r^2} e_r \dots (1)$$

$$\rightarrow \begin{cases} m(\ddot{r} - r\dot{\phi}^2) = -G \frac{Mm}{r^2} \\ r^2 \dot{\phi} = \text{定数} = h \text{ とおく} \end{cases} \quad \begin{cases} m\ddot{r} = m \frac{h^2}{r^3} - G \frac{Mm}{r^2} \dots (2) \\ \dot{\phi} = \frac{h}{r^2} \dots (3) \end{cases}$$

(2)の両辺に  $\dot{r}$  をかけて、

$$m \dot{r} \ddot{r} = \frac{dr}{dt} \left( m \frac{h^2}{r^2} - G \frac{Mm}{r} \right)$$

$$m \frac{d}{dt} \left( \frac{\dot{r}^2}{2} \right) = \frac{dr}{dt} \frac{d}{dr} \left( -\frac{m h^2}{2 r^2} + G \frac{Mm}{r} \right)$$

$$\therefore \frac{d}{dt} \left( \frac{m}{2} \dot{r}^2 \right) = \frac{d}{dt} \left( -\frac{m}{2} \frac{h^2}{r^2} + G \frac{Mm}{r} \right) \quad \therefore \frac{d}{dt} \left( \frac{m}{2} \dot{r}^2 + \frac{m}{2} \frac{h^2}{r^2} - G \frac{Mm}{r} \right) = 0$$

従って、

$$\frac{m}{2} \dot{r}^2 + \frac{m}{2} \frac{h^2}{r^2} - G \frac{Mm}{r} = \text{const.} = E \text{ とおく } (E = K + U) \quad (\text{保存力であることの現れ})$$

$$K = \frac{m}{2} (\underbrace{\dot{r}^2}_{v_r^2} + \underbrace{r^2 \dot{\phi}^2}_{v_\phi^2}) \quad U$$

いす、これらより、

$$\begin{cases} \dot{\phi} = \frac{h}{r^2} \\ \dot{r}^2 = \frac{2}{m} \left\{ E - \frac{m h^2}{2 r^2} + G \frac{Mm}{r} \right\} \end{cases} \quad \text{である。}$$

$$V_{\text{eff}}(r) = \frac{m h^2}{2 r^2} - G \frac{Mm}{r} \quad (\text{有効ポテンシャル}) \text{ と置くと、}$$

$$\dot{r} = 0 \quad (\text{すなわち } K' = 0) \text{ となるのは } E = V_{\text{eff}}(r) \text{ のとき}$$

$\dot{r} = 0$  ( $K' = 0$ ) となる  $r$  を求める。(  $r \neq 0$  かつ  $r > 0$  とする )

$$E = \frac{m h^2}{2 r^2} - G \frac{Mm}{r}$$

$$\therefore \frac{E}{r^2} \left\{ r^2 + 2 \left( \frac{GMm}{2E} \right) r - \frac{m}{2E} h^2 \right\} = 0$$

$$\therefore r_{\pm} = -\frac{GMm}{2E} \pm \sqrt{\left( \frac{GMm}{2E} \right)^2 + \frac{m h^2}{2E}} = +\frac{GMm}{(-2E)} \pm \sqrt{\left( \frac{GMm}{-2E} \right)^2 + \left( \frac{m h^2}{-2E} \right)} \quad (\sqrt{\text{の中は正とする}})$$

正となる方に運動する

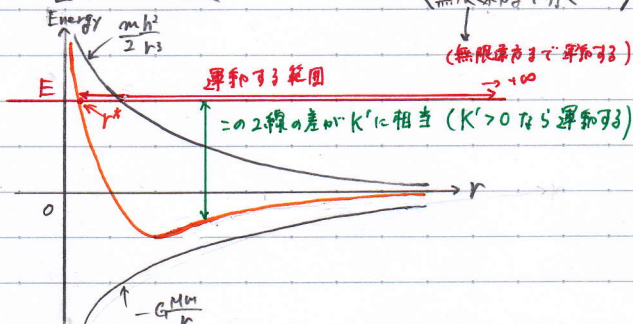
- $E < 0$  ならば  $r_+$ ,  $r_-$  とともに正

- $E > 0$  ならば  $r_-$  のみ正で ( $r_+$  とは  $\infty$ )

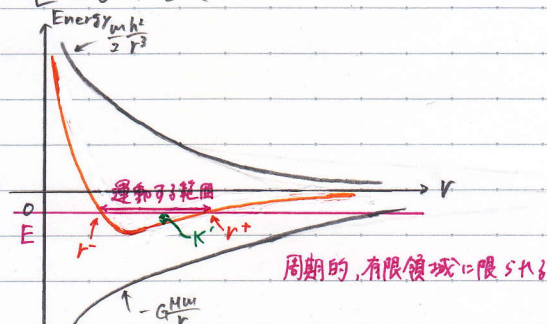
$$r_* = -\frac{GMm}{2E} + \sqrt{\left( \frac{GMm}{2E} \right)^2 + \frac{m h^2}{2E}}$$

グラフにすれば、

・  $E > 0$  のとき



・  $E < 0$  のとき



・ 二つめは、ケプラー-3法則を式で証明していく

$r$  が  $\phi$  or  $t$  の関数であることを利用して、楕円軌道と時間依存性を考える。

**軌道** ( $r$  は  $\phi$  の関数であることの利用)

$r = r(\phi)$  であるとして、

$$\begin{cases} \ddot{r} = \frac{h^2}{r^3} - GM \frac{1}{r^2} \quad \dots (1) & (\text{運動方程式より}) \quad (\text{ケプラー-第2法則の証明(?)}) \\ r^2 \dot{\phi} = h \text{ (定数)} \quad \dots (2) \end{cases}$$

113.

$$\begin{aligned} \dot{r} &= \frac{dr}{dt} = \frac{dr(\phi)}{d\phi} \frac{d\phi}{dt} = \frac{dr}{d\phi} \cdot \dot{\phi} = \frac{h}{r^2} \frac{dr}{d\phi} = -h \frac{d}{d\phi} \left( \frac{1}{r(\phi)} \right) \\ \ddot{r} &= -h \frac{d}{d\phi} \left\{ \frac{d}{d\phi} \left( \frac{1}{r} \right) \right\} = -h \frac{d}{d\phi} \left\{ \frac{d}{d\phi} \left( \frac{1}{r} \right) \right\} \cdot \frac{d\phi}{dt} = -h \frac{d^2}{d\phi^2} \left( \frac{1}{r} \right) \cdot \dot{\phi} = -\frac{h^2}{r^2} \frac{d^2}{d\phi^2} \left( \frac{1}{r} \right) \quad \dots (3) \end{aligned}$$

(3) を (1) に代入して、

$$-\frac{h^2}{r^2} \frac{d^2}{d\phi^2} \left( \frac{1}{r} \right) = \frac{h^2}{r^3} - GM \frac{1}{r^2}$$

$$\therefore \frac{d^2}{d\phi^2} \left( \frac{1}{r} \right) = -\frac{1}{r} + \frac{GM}{h^2}$$

$$\therefore \frac{d^2}{d\phi^2} \left( \frac{1}{r} - \frac{GM}{h^2} \right) = -\left( \frac{1}{r} - \frac{GM}{h^2} \right)$$

$$X = \frac{1}{r} - \frac{GM}{h^2} \text{ とおくと、}$$

$$\frac{d^2 X}{d\phi^2} = -X \quad (\text{単振動の式になった!!})$$

$$\therefore \frac{1}{r} - \frac{GM}{h^2} = X = A \cos(\phi - \phi_0) \quad (A \text{ と } \phi_0 \text{ は初期値に依存する定数})$$

$$\therefore \frac{1}{r} = \frac{GM}{h^2} + A \cos(\phi - \phi_0)$$

$$\therefore r = \frac{1}{\frac{GM}{h^2} + A \cos(\phi - \phi_0)} = \frac{\frac{h^2}{GM}}{1 + \frac{Ah^2}{GM} \cos(\phi - \phi_0)}$$

$$l = \frac{h^2}{GM}, \quad E = \frac{Ah^2}{GM} \text{ とおくと、}$$

$$\therefore r = \frac{l}{1 + \varepsilon \cos(\phi - \phi_0)} \quad (\text{2次曲線の極方程式})$$

$\phi_0$  は  $r$  が最小になる  $\phi$  の値。

つまり  $r$  が最小になる  $\phi$  とし、

✓  $(r$  が最小のときは  $\cos$  が最大)

$\phi - \phi_0$  は結局  $T$  の位相  $([0, 2\pi))$  なのて、 $\phi_0 = 0$  としておいて楽になる。

よて、 $\phi_0 = 0$  としてよく、 $\phi = 0$  で  $r$  は最小値  $r^-$ 、 $\phi = \pi$  で  $r$  は最大値  $r^+$  とする。

(結果的には  $r^- = a - c$ 、 $r^+ = a + c$  となる)

すなわち、

$$\begin{cases} \varphi = 0 \text{ のとき } \frac{1}{r} = \frac{1}{r^-} = \frac{1+E}{l} \quad \dots (*) \\ \varphi = \pi \text{ のとき } \frac{1}{r} = \frac{1}{r^+} = \frac{1-E}{l} \end{cases}$$

よって、

$$\frac{1}{r^+ r^-} = \frac{1-E^2}{l^2}$$

$$\therefore E^2 = 1 - \frac{l^2}{r^+ r^-}$$

$$r_{\pm} = \left( -\frac{GMm}{-2E} \right) \pm \sqrt{\left( \frac{GMm}{-2E} \right)^2 - \left( \frac{mh^2}{-2E} \right)} \quad \text{より、} r^+ r^- = -\frac{mh^2}{2E} \quad \text{よって、}$$

$$\begin{aligned} E^2 &= 1 - \left( \frac{-2El^2}{mh^2} \right) \\ &= 1 - \left\{ \frac{-2Eh^2}{m(GM)^2} \right\} \end{aligned}$$

$E < 0$  のとき、

$$E^2 < 1 \quad \therefore E < 1$$

従って  $E < 0 \Rightarrow E < 1$  ということが分かる。

★  $E < 1$  :  $r$  は楕円軌道を描く ( $E = \frac{c}{a} < 1$ ) (ケプラー - 第1法則の証明)

$$\begin{aligned} & (= \text{これは、よって、} r^- = a - c, r^+ = a + c \text{ とわかる。これは (*) より}) \\ & \left( E = \frac{c}{a}, l = \frac{b^2}{a} \text{ とわかる} \right) \quad \text{図を描くとわかる (頑張ってください)} \end{aligned}$$

★  $E > 0$  のときは...

$$E = \frac{h^2 A}{GM}, \quad E^2 > 1 \quad \therefore E > 1 \quad \dots (1)$$

$r$  が最小となるのは  $\varphi = \pi$  のとき、 $\varphi_0 = \pi$  とおける。

$$r = \frac{l}{1 + E \cos(\varphi - \varphi_0)} = \frac{l}{1 - E \cos \varphi} \quad \dots (2)$$

(1), (2) より、 $r$  は双曲線軌道を描くことがわかる。

**時間依存性** ( $r$  は  $t$  の関数であることの利用)  $\left( r^+ \text{ と } r^- \text{ は } r^2 + 2\left(\frac{GMm}{2E}\right)r - \frac{m}{2E}h^2 = 0 \text{ の解} \right)$

$$E = \frac{m}{2} \dot{r}^2 + \frac{m}{2} \frac{h^2}{r^2} - G \frac{Mm}{r} \quad \text{より、}$$

$$\frac{dr}{dt} = \dot{r} = \pm \sqrt{\frac{2}{m} \left( E - \frac{m}{2} \frac{h^2}{r^2} + G \frac{Mm}{r} \right)} = \pm \sqrt{\left( -\frac{2E}{m} \right) \frac{(r^+ - r)(r - r^-)}{r^2}}$$

$$\therefore dt = \pm \sqrt{\frac{m}{2E}} \frac{r dr}{\sqrt{(r^+ - r)(r - r^-)}} \quad (r^- < r < r^+) \quad \dots (A) \quad (\theta = 0 \text{ 時 } r = r^-, \theta = \pi \text{ 時 } r = r^+)$$

$\Rightarrow$  ここで、 $r = \left( \frac{r^+ + r^-}{2} \right) - \left( \frac{r^+ - r^-}{2} \right) \cos \theta$  (受け入れましょう) と何う×変換すると、

$$r^+ - r = \frac{r^+ - r^-}{2} (1 + \cos \theta), \quad r - r^- = \frac{r^+ - r^-}{2} (1 - \cos \theta)$$

とわかる。

$$\therefore (r^+ - r)(r - r^-) = \left( \frac{r^+ - r^-}{2} \right)^2 (1 - \cos^2 \theta) = \left( \frac{r^+ - r^-}{2} \right)^2 \sin^2 \theta \quad \dots (B)$$

$$\text{また、} \frac{dr}{d\theta} = \frac{r^+ - r^-}{2} \sin \theta \quad \therefore dr = \frac{r^+ - r^-}{2} \sin \theta d\theta \quad \dots (C)$$

(A), (B), (C) より、

$$dt = \pm \sqrt{-\frac{m}{2E}} \left\{ \left( \frac{r^+ + r^-}{2} \right) - \left( \frac{r^+ - r^-}{2} \right) \cos \theta \right\} d\theta$$

$$= \pm \sqrt{-\frac{m}{2E}} a(1 - \varepsilon \cos \theta) d\theta \quad (\because r_1 = a - c, r_2 = a + c, \varepsilon = \frac{c}{a})$$

両辺積分して、

$$t + t_0 = \pm \sqrt{-\frac{m}{2E}} a(\theta - \varepsilon \sin \theta) \quad (t_0 \text{ は積分定数という名の初期値に依存する定数})$$

$t > 0$  なら  $+$  の方をとり、 $t_0 = 0$  とし、 $(\varphi_0 = 0 \text{ と } t = 0 \text{ と考えたのは同じ})$

$$t = \sqrt{-\frac{m}{2E}} a(\theta - \varepsilon \sin \theta) \quad \dots (D)$$

$\theta = 2\pi$  になるとき、 $t = T$  (周期) となるので、

$$T = \sqrt{-\frac{m}{2E}} a \cdot 2\pi = \sqrt{\frac{GMm}{-2E}} \frac{1}{GM} a \cdot 2\pi = \frac{a^{\frac{3}{2}}}{\sqrt{GM}} 2\pi \quad \dots (E)$$

$$\left( \because r^+ + r^- = -\frac{GMm}{E} \text{ (解と係数の関係)}, r^+ + r^- = a + c + a - c = 2a \right)$$

$$\text{より、} a = -\frac{GMm}{2E}$$

$$\omega = \frac{2\pi}{T} = \sqrt{-\frac{2E}{m}} \frac{1}{a} \quad \text{とすれば、(D) に代入して、}$$

$$\boxed{\omega t = \theta - \varepsilon \sin \theta} \quad \text{ケプラーの方程式}$$

が導かれる。(E は平均角速度)

また、(E) より、

$$\frac{a^3}{T^2} = \frac{GM}{4\pi^2} = \frac{1}{4\pi^2} \frac{GM}{h^2} \cdot h^2 = \frac{1}{4\pi^2} \frac{h^2}{l}$$

となり、 $\frac{a^3}{T^2}$  は惑星に依存しない定数であったことから、 $\frac{a^3}{T^2}$  が一定値で

あることが証明された。(ケプラー - 第3法則の証明)

## 2-3 地球表面での物体の運動

今までは、宇宙規模の話だったが、ここからはぐっと身近な現象の考察を行う。

### (1) 重力のみによる落体、振り子の運動

#### ・落体

前々節で述べたように、地球表面から高さ  $z$  のところにいる物体のポテンシャルエネルギーは、

$$U(z) = mgz + U_0$$

(既に見たように、 $U_0$  は  $z=0$  における地球との万有引力のポテンシャルエネルギー)

よって、地球の引力(重力)は、

$$\mathbf{F} = -\nabla U(z) = -\frac{\partial U}{\partial z} \mathbf{e}_z = -mg \mathbf{e}_z$$

従って、運動方程式は、

$$m\ddot{\mathbf{r}} = -mg\mathbf{e}_z \quad \dots (1)$$

成分ごとに分解すると、

$$\begin{cases} m\ddot{x} = 0 \\ m\ddot{y} = 0 \\ m\ddot{z} = -mg \end{cases} \quad \therefore \begin{cases} \ddot{x} = 0 \\ \ddot{y} = 0 \\ \ddot{z} = -g \end{cases} \quad \therefore \begin{cases} \dot{x} = v_x^0 \\ \dot{y} = v_y^0 \\ \dot{z} = -gt + v_z^0 \end{cases} \quad \therefore \begin{cases} x = v_x^0 t + x_0 \\ y = v_y^0 t + y_0 \\ z = -\frac{1}{2}gt^2 + v_z^0 t + z_0 \end{cases}$$

( $v_x^0, v_y^0, v_z^0, x_0, y_0, z_0$  は初期条件に依る定数)

また、(1) の両辺に  $\dot{\mathbf{r}}$  を内積して、

$$\dot{\mathbf{r}} \cdot m\ddot{\mathbf{r}} = \dot{\mathbf{r}} \cdot (-mg\mathbf{e}_z)$$

$$m(\dot{x}\ddot{x} + \dot{y}\ddot{y} + \dot{z}\ddot{z}) = -mg\dot{z}$$

$$\therefore \frac{d}{dt} \left\{ m \left( \frac{\dot{x}^2}{2} + \frac{\dot{y}^2}{2} + \frac{\dot{z}^2}{2} \right) \right\} = \frac{d}{dt} (-mgz)$$

$$\therefore \frac{d}{dt} \left\{ m \left( \frac{\dot{x}^2}{2} + \frac{\dot{y}^2}{2} + \frac{\dot{z}^2}{2} \right) + mgz \right\} = 0$$

$$\therefore E = \frac{m}{2}(\dot{x}^2 + \dot{y}^2 + \dot{z}^2) + mgz = \text{const.} \quad (\text{エネルギー保存})$$

#### ・振り子

微小振動の場合：単振動に近似可能

一般の場合：運動方程式から解析していく

==> 重要なポイント：糸の張力  $T$  は定数ではなく、 $(x, y, z)$  に依存するということ！

$$\mathbf{r} = x\mathbf{e}_x + y\mathbf{e}_y + z\mathbf{e}_z$$

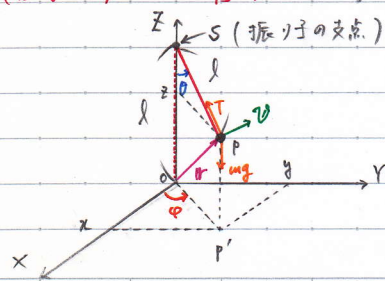
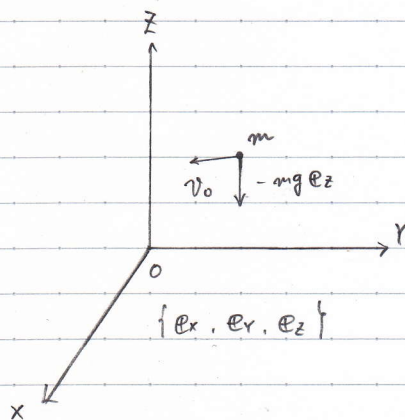
$$\mathbf{r}_s = l\mathbf{e}_z \quad (\mathbf{r}_s = \vec{OS})$$

$$\text{また、} |\mathbf{r} - \mathbf{r}_s| = \sqrt{x^2 + y^2 + (z-l)^2} = l$$

運動方程式は、

$$m\ddot{\mathbf{r}} = -mg\mathbf{e}_z + T \quad \dots (1)$$

$$= -mg\mathbf{e}_z + T \cdot \frac{\mathbf{r}_s - \mathbf{r}}{|\mathbf{r}_s - \mathbf{r}|}$$



$= \tau$ .  $\{x, y, z\}$  を  $\{l, \theta, \varphi\}$  で表すと.

$$\begin{cases} x = l \sin \theta \cos \varphi \\ y = l \sin \theta \sin \varphi \\ z = l - l \cos \theta \quad (l \cos \theta = l - z) \end{cases} \quad \dots (2)$$

また,  $\pi$  の  $x, y, z$  成分は.

$$\begin{aligned} \pi &= (-T \sin \theta \cos \varphi, -T \sin \theta \sin \varphi, T \cos \theta) \\ &= (-T \frac{x}{l}, -T \frac{y}{l}, -T \frac{z-l}{l}) \quad (\because (2)) \end{aligned}$$

これと (1) より, 各成分についての運動方程式は.

$$\begin{cases} m \ddot{x} = -T \frac{x}{l} \\ m \ddot{y} = -T \frac{y}{l} \\ m \ddot{z} = T \frac{l-z}{l} - mg \end{cases}$$

また,  $|r - r_s|^2 = l^2 = x^2 + y^2 + (z-l)^2$  の両辺を  $t$  で微分して.

$$0 = 2\dot{x}x + 2\dot{y}y + 2\dot{z}(z-l)$$

$$= 2\dot{r} \cdot (r - r_s)$$

$$\therefore 0 = 2\dot{r} \cdot \frac{r_s - r}{l} \pi$$

$$\text{すなわち, } \dot{r} \cdot \pi = 0 \quad \therefore \dot{r} \perp \pi$$

(i) 微小振動のとき.

$|x| \ll l, |y| \ll l, |z| \ll l \rightarrow$  2次以上の微小量は無視できる

$$x^2 + y^2 + (z-l)^2 = l^2$$

$$\therefore (z-l)^2 = l^2 - (x^2 + y^2)$$

$$\therefore l - z = \sqrt{l^2 - (x^2 + y^2)} = l \left\{ 1 - \left( \frac{x^2 + y^2}{l^2} \right) \right\}^{\frac{1}{2}} \cong l \left( 1 - \frac{1}{2} \frac{x^2 + y^2}{l^2} \right)$$

$$\therefore z \cong \frac{l}{2} \frac{x^2 + y^2}{l^2} = \frac{l}{2} \left\{ \left( \frac{x}{l} \right)^2 + \left( \frac{y}{l} \right)^2 \right\} \cong 0$$

すなわち,  $\frac{x}{l}, \frac{y}{l}$  は残す  $m, z$  は無視可能 ( $z \cong 0$  より,  $\dot{z} \cong 0, \ddot{z} \cong 0$ )

これを適用させた運動方程式は.

$$\begin{cases} m \ddot{x} = -T \left( \frac{x}{l} \right) & \dots (7) \end{cases}$$

$$\begin{cases} m \ddot{y} = -T \left( \frac{y}{l} \right) & \dots (8) \end{cases}$$

$$\begin{cases} m \ddot{z} \cong T - mg & \dots (9) \end{cases}$$

( $z \cong 0$  を用いて)

$$\text{また } \ddot{z} \cong 0 \text{ より, } T - mg \cong m \ddot{z} \cong 0 \quad \therefore T \cong mg$$

すなわち  $T = mg \dots (2)$  と近似できる ( $T$  は定数と見なす)

(2) を (7) と (8) に代入すると.

$$\begin{cases} \ddot{x} = -\frac{g}{l} x \\ \ddot{y} = -\frac{g}{l} y \end{cases}$$

$x$  方向と  $y$  方向 の式は同じなので、 $x$  方向のみを考える。

$$\ddot{x} = -\frac{g}{l}x \quad (\leftarrow m\ddot{x} = -kx \quad \therefore \ddot{x} = -\frac{k}{m}x \text{ を想起させる式})$$

$F(x) = -m\frac{g}{l}x$  なので保存力である。(  $x^n$  の  $n=1$  ver. )

両辺に  $\dot{x}$  をかけて、

$$\dot{x}\ddot{x} = -\frac{g}{l}x\dot{x}$$

$$\therefore \frac{d}{dt}\left(\frac{\dot{x}^2}{2}\right) = -\frac{g}{l}\frac{d}{dt}\left(\frac{x^2}{2}\right)$$

$$\therefore \frac{d}{dt}\left(\frac{\dot{x}^2}{2} + \frac{1}{2}\left(\frac{g}{l}\right)x^2\right) = 0$$

$$\therefore \frac{\dot{x}^2}{2} + \frac{1}{2}\left(\frac{g}{l}\right)x^2 = \text{const.} = \frac{E}{m} \text{ とおくと}$$

$$\therefore E = \underbrace{\frac{m}{2}\dot{x}^2}_K + \underbrace{\frac{1}{2}\left(\frac{mg}{l}\right)x^2}_U \quad \left( \begin{array}{l} U(x) = \frac{1}{2}\frac{mg}{l}x^2 \text{ あり。} \\ -\frac{d}{dx}U(x) = -m\left(\frac{g}{l}\right)x = F(x) \\ \text{やはり保存力だと確認} \end{array} \right)$$

$$\frac{1}{2}m\dot{x}^2 = 0 \quad (\dot{x}=0) \text{ のとき } x=A \text{ と } x=-A \text{ とおくと}$$

$$E = \frac{m}{2}\dot{x}^2 + \frac{1}{2}\left(\frac{mg}{l}\right)x^2 = \frac{1}{2}\left(\frac{mg}{l}\right)A^2 \quad (A \text{ は振幅})$$

$$\therefore A = \sqrt{\frac{2E}{m\left(\frac{g}{l}\right)}} \quad \dots (1)$$

また、 $A$  は  $|x|$  の最大値なので、 $x \in [-A, A]$

エネルギー保存則から求められた一方で、時間追跡を考察してみよう。

$$K = \frac{m}{2}\dot{x}^2 \text{ あり}$$

$$\dot{x} = \pm \sqrt{\frac{2}{m}K}$$

$$= \pm \sqrt{\frac{2}{m}\left(E - \frac{1}{2}\frac{mg}{l}x^2\right)}$$

$$= \pm \sqrt{\frac{g}{l}(A^2 - x^2)} \quad (\because (1))$$

$$\therefore \frac{dx}{dt} = \pm \sqrt{\frac{g}{l}(A^2 - x^2)}$$

$$dt = \pm \frac{1}{\sqrt{\frac{g}{l}(A^2 - x^2)}} dx$$

両辺積分して、

$$t - t_0 = \pm \sqrt{\frac{l}{g}} \int \frac{1}{\sqrt{A^2 - x^2}} \quad (t_0 \text{ は積分定数})$$

$$x = A \cos \theta \text{ とおくと } dx = -A \sin \theta d\theta, \quad \sqrt{A^2 - x^2} = A \sin \theta \text{ となる。}$$

$$t - t_0 = \pm \sqrt{\frac{l}{g}} \int d\theta = \pm \sqrt{\frac{l}{g}} \theta \quad (\text{積分定数は } t_0 \text{ に集約して})$$

$$\therefore \theta = \pm \sqrt{\frac{g}{l}}(t - t_0)$$

$$\therefore x = A \cos \theta = A \cos \left\{ \pm \sqrt{\frac{g}{l}}(t - t_0) \right\} = A \cos \left\{ \sqrt{\frac{g}{l}}(t - t_0) \right\}$$

$$\omega = \sqrt{\frac{g}{l}} \text{ とおくと}$$

$$\therefore x = A \cos[\omega(t - t_0)]$$

以上から、

$$m\ddot{x} = -m\frac{g}{l}x \text{ の解は } x(t) = A \cos[\omega(t - t_0)] = A^* \sin \omega t + B^* \cos \omega t \quad (\omega = \sqrt{\frac{g}{l}})$$

$$\ddot{x} = -\omega^2 x : \text{単振動(調和振動)の式}$$

$$\text{また、振動数 } \nu \text{ は } \nu = \frac{\omega}{2\pi}, \text{ 周期 } T \text{ は } T = \frac{1}{\nu} = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi\sqrt{\frac{l}{g}} \text{ となる。}$$

振幅  $A$  と周期  $T$  に相関性はないことを示す。← 振り子の等時性という

※ 一般の1次元運動について。(保存力のもと)

保存力  $F(x)$  の下では.

$$U(x) = -\int_{x_0}^x F(x) dx \Leftrightarrow F(x) = -\frac{dU(x)}{dx}$$

となる  $U(x)$  が存在して.

$$m\ddot{x} = -\frac{d}{dx} U(x)$$

となる。

$$\Rightarrow F(x) = -\frac{\partial U}{\partial x} = -\frac{dU(x)}{dx} \text{ が } 0 \text{ になる点 } x$$

**停留点 (平衡点)** という (多数あることもある)

このとき 停留点 には 2 種類あって.

$$\frac{\partial^2 U}{\partial x^2} = \frac{d^2}{dx^2} U(x_0) > 0 : \text{安定なつりあい} \quad (i=1, 2, \dots)$$

$$< 0 : \text{不安定なつりあい}$$

$$\left( \frac{d^2}{dx^2} U(x) > 0 \text{ なら } \frac{d}{dx} U(x) \text{ は単調増加, すなわち } F(x) = -\frac{d}{dx} U(x) \text{ は単調減少} \right)$$

そして 安定な平衡点の近傍における微小振動は単振動になる。

$$|x - x_0| \ll 1 \text{ (長さの単位) のとき}$$

$$U(x) = U(x_0) + \underbrace{\frac{d}{dx} U(x_0)}_{-F(x_0)=0} (x-x_0) + \frac{1}{2!} \underbrace{\frac{d^2}{dx^2} U(x_0)}_{0 \text{ なら } m\omega^2} (x-x_0)^2 + \frac{1}{3!} \frac{d^3}{dx^3} U(x_0) (x-x_0)^3 + \dots$$

$x = x_0$  を安定な平衡点とし  $x = x_0$  をわけて

テイラー展開する

→  $|x - x_0| \ll 1$  で 3 次以下は無視する

→  $\omega$  は  $(x-x_0)$  の 1 次関数 (1 つ目)

→ 解は  $x = x_0 \cos[\omega(t-t_0)] + x_0$  の単振動の式となる

また、証明は難しいので省略するが、多自由度系でも安定な平衡点近傍では **単振動の重ね合わせ** となる。

(ii) 一般の場合

また極座標で考えた方が便利なので、極座標で考える。

$x, y, z \rightarrow (r, \theta, \phi)$   $\{e_r, e_\theta, e_\phi\}$  に変換する

$$e_r = \sin\theta (\cos\phi e_x + \sin\phi e_y) + \cos\theta e_z$$

$$e_\theta = \cos\theta (\cos\phi e_x + \sin\phi e_y) + \sin\theta e_z$$

$$e_\phi = -\sin\phi e_x + \cos\phi e_y$$

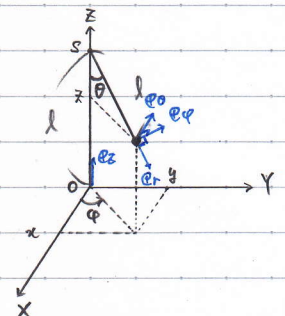
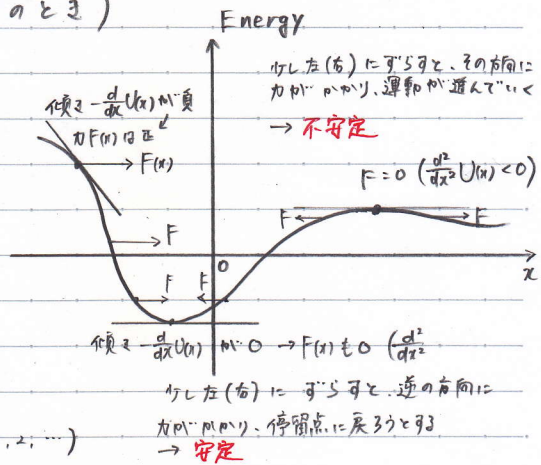
(前や上と  $e_z$  の  $\pm$  が違うが、考え方は同じ)

$t$  で微分したものを頑張って計算して  $e_r, e_\theta, e_\phi$  で表すと.

$$\begin{cases} \dot{e}_r = \dot{\theta} e_\theta + \sin\theta \dot{\phi} e_\phi \\ \dot{e}_\theta = -\dot{\theta} e_r + \cos\theta \dot{\phi} e_\phi \\ \dot{e}_\phi = -\sin\theta \dot{\phi} e_r - \cos\theta \dot{\phi} e_\theta \end{cases}$$

また図より.

$$e_z = -\cos\theta e_r + \sin\theta e_\theta$$



これを using. ( $l$  は定数であることに注意して)

$$\begin{cases} \mathbf{r} = l \mathbf{e}_z + l \mathbf{e}_r \\ \dot{\mathbf{r}} = l \dot{\mathbf{e}}_r = l (\dot{\theta} \mathbf{e}_\theta + \sin \theta \dot{\phi} \mathbf{e}_\phi) \\ \ddot{\mathbf{r}} = l \ddot{\mathbf{e}}_r = \dots = l \{ (-\dot{\theta}^2 - \sin^2 \theta \dot{\phi}^2) \mathbf{e}_r + (\ddot{\theta} - \sin \theta \cos \theta \dot{\phi}^2) \mathbf{e}_\theta \\ + (-\sin \theta \ddot{\phi} - 2 \cos \theta \dot{\theta} \dot{\phi}) \mathbf{e}_\phi \} \end{cases}$$

また,

$$\begin{cases} -mg \mathbf{e}_z = mg \cos \theta \mathbf{e}_r - mg \sin \theta \mathbf{e}_\theta \\ \Pi = -T \mathbf{e}_r \end{cases}$$

以上より、運動方程式は、( $\ddot{\mathbf{r}}$  と  $\mathbf{e}_z$  と  $\Pi$  の成分について解析できる)

$$m \ddot{\mathbf{r}} = -mg \mathbf{e}_z + \Pi$$

成分ごとに分解すると、( $\mathbf{e}_r, \mathbf{e}_\theta, \mathbf{e}_\phi$  の係数比較をすると、)

$$\begin{cases} r: -ml(\dot{\theta}^2 + \sin^2 \theta \dot{\phi}^2) = mg \cos \theta - T \quad \dots (\alpha) \\ \theta: ml(\ddot{\theta} - \sin \theta \cos \theta \dot{\phi}^2) = -mg \sin \theta \quad \dots (\beta) \\ \phi: -ml(\sin \theta \ddot{\phi} - 2 \cos \theta \dot{\theta} \dot{\phi}) = 0 \quad \dots (\gamma) \end{cases}$$

ここで、 $(\gamma)$  について考えてみよう。

$(\gamma)$  式を解けるならば、 $(\gamma)$  式が成立する  $\phi$  が少なくとも一つ存在するはずである。

そこで試しに  $\phi = 0$  を代入すると、なんと (左辺) = 0 となる!

よって  $\phi = 0$  は  $(\gamma)$  式の解の一つなので、 $\phi = 0$  として進めていこう。

これを  $(\alpha), (\beta)$  に代入すると、

$$\begin{cases} -ml\dot{\theta}^2 = mg \cos \theta - T \quad \dots (\alpha)^* \\ ml\ddot{\theta} = -mg \sin \theta \quad \dots (\beta)^* \end{cases}$$

$$\left( \begin{array}{l} \text{もし、} \sin \theta \approx 0 \text{ と近似すれば、} (|\theta| \ll \pi) \\ ml\ddot{\theta} \approx -mg\theta \\ \phi = 0 \text{ より、} x = l \sin \theta \approx x\theta \\ \therefore m\ddot{x} \approx -m\frac{g}{l}x \\ \text{となる (i) と (ii) } \end{array} \right)$$

$(\beta)^*$  より、

$$\ddot{\theta} = -\frac{g}{l} \sin \theta$$

両辺に  $\dot{\theta}$  をかけると

$$\dot{\theta} \ddot{\theta} = -\frac{g}{l} \sin \theta \cdot \dot{\theta}$$

$$\frac{d}{dt} \left( \frac{1}{2} \dot{\theta}^2 \right) = \frac{d}{dt} \left( \frac{g}{l} \cos \theta \right)$$

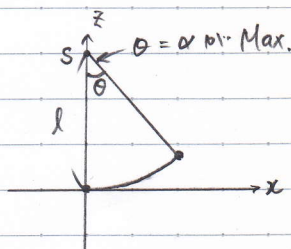
$$\therefore \frac{d}{dt} \left( \frac{1}{2} \dot{\theta}^2 - \frac{g}{l} \cos \theta \right) = 0$$

従って

$$\frac{1}{2} \dot{\theta}^2 - \frac{g}{l} \cos \theta = \text{const.}$$

$\dot{\theta} = 0$  のとき  $\theta = \theta = \alpha$  と  $\alpha' < \alpha$  .

$$\frac{1}{2} \dot{\theta}^2 - \frac{g}{l} \cos \theta = -\frac{g}{l} \cos \alpha$$



このとき

$$\dot{\theta} = \frac{d\theta}{dt} = \pm \sqrt{2\frac{g}{l}(\cos\theta - \cos\alpha)}$$

$$\therefore dt = \sqrt{\frac{l}{g}} \frac{d\theta}{\sqrt{2(\cos\theta - \cos\alpha)}}$$

両辺

$$= \frac{1}{2} \frac{l}{g} \frac{d\theta}{\sqrt{\sin^2(\frac{\alpha}{2}) - \sin^2(\frac{\theta}{2})}}$$

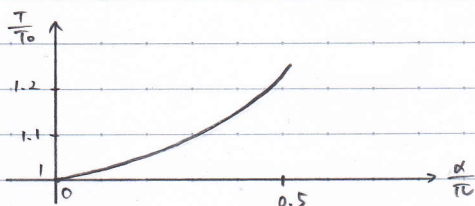
→ これは、残念ながら M.S. 初等関数では表せない

両辺積分して

$$T = 4 \int_0^\alpha \frac{1}{2} \frac{l}{g} \frac{d\theta}{\sqrt{\sin^2 \frac{\alpha}{2} - \sin^2 \frac{\theta}{2}}} = 4 \sqrt{\frac{l}{g}} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \frac{d\phi}{\sqrt{1 - \sin^2 \frac{\alpha}{2} \sin^2 \phi}}$$

「」のところは、「第一種完全楕円積分」と呼ばれ、単調増加する  
ことになっている。

よって、 $T_0 = 2\pi \sqrt{\frac{l}{g}}$  として



$\alpha$  は振幅に関係するので、振幅  $T$  と周期  $A$  に相関性がある ことが  
わかる。すなわち、振り子の等時性 がぶれる!!

※ ちなみに、筆者の調べたところによると

$$T = 2\pi \sqrt{\frac{l}{g}} \left\{ \sum_{n=0}^{\infty} \left[ \frac{(2n-1)!!}{(2n)!!} \right]^2 \sin^{2n} \frac{\alpha}{2} \right\}$$

となるそうである。(正確性は保証しませんが)

(参考: <http://hooktail.sub.jp/math/physics/elliptical/>)

## (2) 空気抵抗が存在する場合

・ 空気(流体)中では流体の粘性による抵抗力  $F$  を受ける。

$|v| \ll 1$  (速さの単位) のとき  $F$  は  $v$  に比例し。

$$F = -6\pi a\eta v \quad (a \text{ は球体の半径, } \eta \text{ は流体の粘性係数})$$

$$= -2m\gamma v \text{ と } 10^{-4} \times 2 \text{ ライナス} \text{ する } \Rightarrow \text{と} \text{ する。} (\gamma \text{ は定数})$$

## ・ 落体

運動方程式は、(z軸方向のみとする)

$$m\dot{z} = -mg - 2m\gamma \dot{z} \quad (\because v = \dot{z} e_z)$$

以降  $\dot{z} = v$  と書くことにすると、 $\dot{z} = \frac{dv}{dt}$  なので、

$$\dot{z} = -g - 2\gamma v$$

$$\frac{dv}{dt} = -2\gamma \left(v + \frac{g}{2\gamma}\right) \quad \leftarrow \frac{g}{2\gamma} \text{ は } t \text{ に関わらない定数なので}$$

$$\frac{d\left(v + \frac{g}{2\gamma}\right)}{dt} = -2\gamma \left(v + \frac{g}{2\gamma}\right) \quad \text{勝手に } \left(v + \frac{g}{2\gamma}\right) \text{ と置いて良いという } \Rightarrow \text{これは前でも } F \text{ は } v$$

$$\therefore dt = -\frac{1}{2\gamma} \frac{d\left(v + \frac{g}{2\gamma}\right)}{\left(v + \frac{g}{2\gamma}\right)}$$

両辺積分して

$$t + C = -\frac{1}{2\gamma} \log \left| v + \frac{g}{2\gamma} \right| \quad (C \text{ は積分定数})$$

$$\therefore \left| v + \frac{g}{2\gamma} \right| = e^{-2\gamma(t+C)}$$

$$\therefore v + \frac{g}{2\gamma} = \pm e^{-2\gamma C} e^{-2\gamma t} \quad \leftarrow \begin{matrix} * \\ \end{matrix}$$

$$= A e^{-2\gamma t} \quad (\pm e^{-2\gamma C} \text{ は定数と見るはずなので、} A \text{ とおいた})$$

$$t=0 \text{ で } v = v_0 \text{ として}$$

$$A = v_0 + \frac{g}{2\gamma}$$

従って

$$v(t) + \frac{g}{2\gamma} = \left(v_0 + \frac{g}{2\gamma}\right) e^{-2\gamma t}$$

$$\underline{v(t) = -\frac{g}{2\gamma} + \left(v_0 + \frac{g}{2\gamma}\right) e^{-2\gamma t}}$$

$$t \rightarrow +\infty \text{ で}$$

$$v_{\infty} = -\frac{g}{2\gamma}$$

※ 授業では

$$\left| v + \frac{g}{2\gamma} \right| = c' e^{-2\gamma t} \quad (c' = e^{-2\gamma C})$$

$$t=0 \text{ で } v = v_0 \text{ として}$$

$$\left| v_0 + \frac{g}{2\gamma} \right| = c'$$

$$\therefore \left| v + \frac{g}{2\gamma} \right| = \left| v_0 + \frac{g}{2\gamma} \right| e^{-2\gamma t}$$

$e^{-2\gamma t}$  より、両辺の絶対値の中身の符号は一致するので、

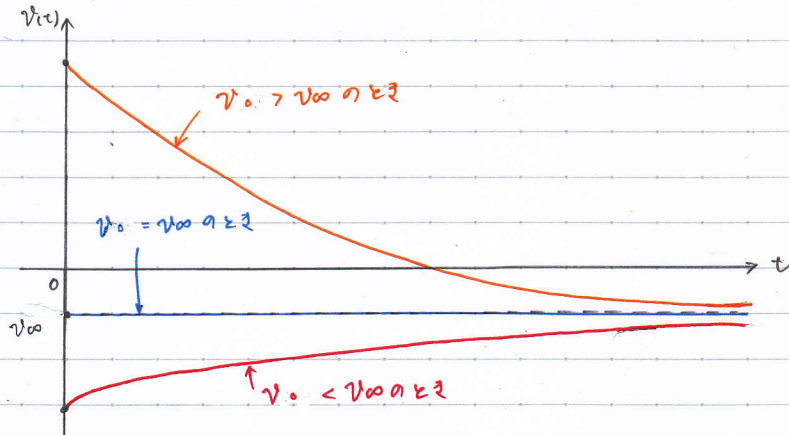
$$v + \frac{g}{2\gamma} = \left(v_0 + \frac{g}{2\gamma}\right) e^{-2\gamma t}$$

$v + \frac{g}{2\gamma} > 0$  なら、(右辺)  $> 0$  になるはずなので、 $v_0 + \frac{g}{2\gamma} > 0$

$< 0$  でも同様

としていたが、個人的に分かりにくい気がしたので、  
筆者が以前学んだ方法で説明した。

これを図示すると。



さて、さらにこれを  $t$  で積分してみよう。

$$\dot{z}(t) = -\frac{g}{2\delta} + (v_0 + \frac{g}{2\delta}) e^{-2\delta t}$$

$t$  で積分して、

$$z(t) = -\frac{g}{2\delta} t - \frac{1}{2\delta} (v_0 + \frac{g}{2\delta}) e^{-2\delta t} + D \quad (D \text{ は積分定数})$$

$t=0$  で  $z(t) = z_0$  とし、

$$z_0 = -\frac{1}{2\delta} (v_0 + \frac{g}{2\delta}) + D$$

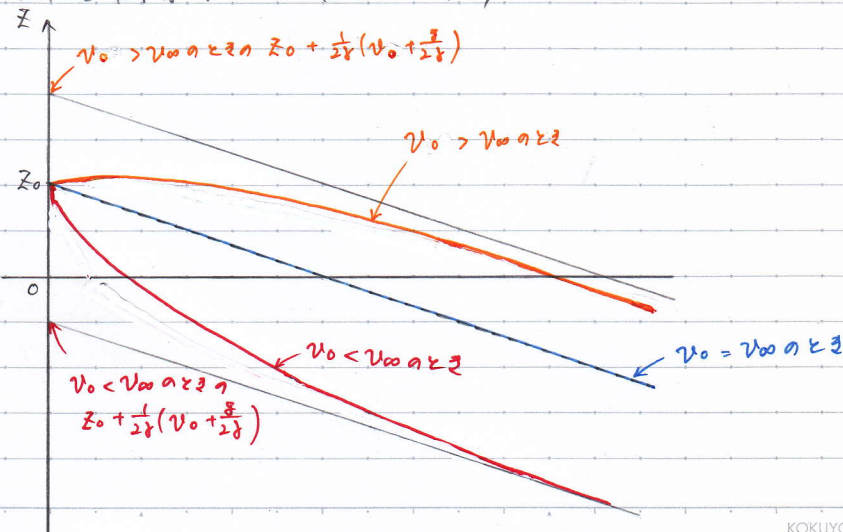
$$\therefore D = z_0 + \frac{1}{2\delta} (v_0 + \frac{g}{2\delta})$$

従って、

$$z(t) = -\frac{g}{2\delta} t - \frac{1}{2\delta} (v_0 + \frac{g}{2\delta}) e^{-2\delta t} + z_0 + \frac{1}{2\delta} (v_0 + \frac{g}{2\delta})$$

$$\therefore \underline{z(t) = z_0 - \frac{g}{2\delta} t + \frac{1}{2\delta} (v_0 + \frac{g}{2\delta}) (1 - e^{-2\delta t})}$$

これを図示すると、( $z_0 > 0$  とする)



# ・振り子

微小近似のときのみを扱う。

以下、 $\omega_0^2 = \frac{g}{l}$  とする

右図のように  $x$  軸のみを考えると、

運動方程式は、

$$m\ddot{x} = -m\frac{g}{l}x - 2m\gamma\dot{x}$$

$$= -m\omega_0^2 x - 2m\gamma\dot{x}$$

$$\therefore \ddot{x} = -\omega_0^2 x - 2\gamma\dot{x}$$

$$\therefore \ddot{x} + 2\gamma\dot{x} + \omega_0^2 x = 0 \quad \cdots \textcircled{1}$$

これは  $x$  についての 齊次、2階、線型、微分方程式 のため、以下のように解ける。

$$\left( \begin{array}{l} \text{右辺は定数} \\ \text{("0") と "0" のみ} \end{array} \right) \quad \left( \begin{array}{l} \ddot{x}, \dot{x}, x \text{ について} \\ x_1(t), x_2(t) \text{ のとき } x_3(t) \equiv c_1 x_1(t) + c_2 x_2(t) \text{ と解になる} \end{array} \right) \quad \textcircled{1} \text{ あと "0" 使う$$

## <解法>

① まず、便利のため、解を複素数の範囲まで拡張する。

$$x(t) \rightarrow z(t) = x(t) + y(t) \cdot i$$

$z(t)$  の解とすると、①は "複素数として 0" なのだ。

実部も虚部も 0、すなわち①の解となる。(0 じゃないと仮定すると矛盾しますね) 式でいえる。

$$\ddot{z}(t) + 2\gamma \dot{z}(t) + \omega_0^2 z(t) = 0$$

$$\therefore \{\ddot{x}(t) + i\ddot{y}(t)\} + 2\gamma \{\dot{x}(t) + i\dot{y}(t)\} + \omega_0^2 \{x(t) + iy(t)\} = 0$$

$$\therefore \ddot{x}(t) + 2\gamma \dot{x}(t) + \omega_0^2 x(t) = 0 \text{ かつ } \underbrace{\ddot{y}(t) + 2\gamma \dot{y}(t) + y(t)}_0 \cdot i = 0$$

と自明である。

② では次に思い切って、 $z(t) = ce^{\lambda t}$  ( $c, \lambda$  は複素定数) と仮定してみよう。

$$\left( \lambda = \lambda_1 + \lambda_2 i \quad (\lambda_1, \lambda_2 \in \mathbb{R}) \text{ とする。} \right)$$

$$e^{\lambda t} = e^{\lambda_1 t} \cdot e^{i\lambda_2 t} = e^{\lambda_1 t} \cdot \cos(\lambda_2 t) + i \sin(\lambda_2 t)$$

このとき、

$$\dot{z}(t) = \lambda ce^{\lambda t} = \lambda z(t)$$

$$\ddot{z}(t) = \lambda \dot{z}(t) = \lambda^2 z(t)$$

いかなる  $t$  でも成立する恒等式

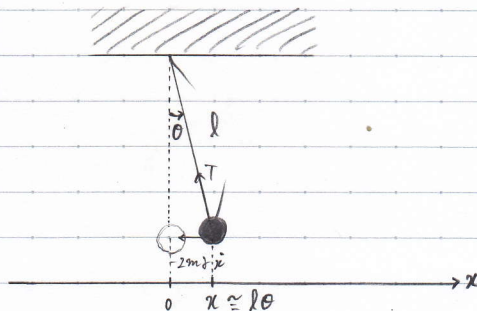
なので、 $z(t)$  かつ①の解とすると、

$$\ddot{z} + 2\gamma \dot{z} + \omega_0^2 z = (\lambda^2 + 2\gamma\lambda + \omega_0^2) z(t) = 0$$

$z(t)$  は恒等的に 0 ではないので、

$$\lambda^2 + 2\gamma\lambda + \omega_0^2 = 0$$

$$\therefore \lambda = -\gamma \pm \sqrt{\gamma^2 - \omega_0^2}$$



(i)  $\gamma < \omega_0$  のとき.

$$\lambda = -\gamma \pm i\sqrt{\omega_0^2 - \gamma^2} \quad (\text{複素数解})$$

(ii)  $\gamma > \omega_0$  のとき.

$$\lambda = -\gamma \pm \sqrt{\gamma^2 - \omega_0^2} \quad (\text{実数解})$$

(iii)  $\gamma = \omega_0$  のとき

$$\lambda = -\gamma = -\omega_0 \quad (\text{実数重解})$$

の3パターンがある。ひとつずつ見ていくことにする。

(i)  $\gamma < \omega_0$  のとき.

$$\lambda = -\gamma \pm i\sqrt{\omega_0^2 - \gamma^2}$$

$$= -\gamma \pm i\omega \quad (\omega = \sqrt{\omega_0^2 - \gamma^2} \in \mathbb{R} \text{ とおいた})$$

このとき.

$$Z(t) = ce^{\lambda t}$$

$$= ce^{(-\gamma \pm i\omega)t}$$

$$= ce^{-\gamma t} \cdot e^{\pm i\omega t}$$

$$= ce^{-\gamma t} [\cos(\omega t) \pm i \sin(\omega t)]$$

従って、 $Z(t)$  の解のとき.

$$ce^{-\gamma t} \cos(\omega t) \text{ と } \pm ce^{-\gamma t} \sin(\omega t) \text{ も } \textcircled{1} \text{ の解になる}$$

ので、この2つを任意に重ね合わせて、 $\textcircled{2}$ を用いた、 $\textcircled{1}$ の解  $x(t)$  は.

$$x(t) = e^{-\gamma t} [a \cos(\omega t) + b \sin(\omega t)] \quad (a, b \in \mathbb{R})$$

$$\therefore \dot{x}(t) = -\gamma e^{-\gamma t} [a \cos(\omega t) + b \sin(\omega t)] + e^{-\gamma t} [-a\omega \sin(\omega t) + b\omega \cos(\omega t)]$$

$t=0$  のとき  $x = x_0$ ,  $\dot{x} = v_0$  とすると.

$$\begin{cases} x_0 = a \\ v_0 = -\gamma a + \omega b \end{cases} \quad \therefore \begin{cases} a = x_0 \\ b = \frac{1}{\omega} (v_0 + \gamma x_0) \end{cases}$$

これらより.

$$x(t) = e^{-\gamma t} \left[ x_0 \cos(\omega t) + \frac{v_0 + \gamma x_0}{\omega} \sin(\omega t) \right] \quad (\omega = \sqrt{\omega_0^2 - \gamma^2}, \gamma < \omega_0)$$

$$\left( \begin{array}{l} \text{ここで特に } \omega < \omega_0 \text{ より、周期 } T \text{ は } T > T_0 \\ \gamma \rightarrow 0 \text{ とすると } \omega \rightarrow \omega_0 \text{ となる} \end{array} \right)$$

(ii)  $\gamma > \omega_0$  のとき

$$\lambda = -\gamma \pm \nu \quad (\nu = \sqrt{\gamma^2 - \omega_0^2} \text{ とおいた, } \nu < \gamma)$$

このとき.

$$Z(t) = ce^{\lambda t}$$

$$= ce^{(-\gamma \pm \nu)t} \quad (\in \mathbb{R})$$

( $\uparrow$   $c$  は実数とは言っていないのは仕方ないので、板書ではこうなっていました。  
 $\lambda$  は実数なので、 $c$  も実数とみなしているのでは無いかと判断しました。)

従って  $Z(t)$  の ① の解のとき、

$ce^{-(\gamma+\nu)t}$  も  $ce^{-(\gamma-\nu)t}$  ものの解になる

( $\gamma+\nu > 0$  かつ  $\gamma-\nu > 0$  である、 $\gamma-\nu$  は非常に小さい数)

ので、この2つを任意に重ね合わせて ( $\therefore$  ④)、① の解  $x(t)$  は、

$$x(t) = a_+ e^{-(\gamma+\nu)t} + a_- e^{-(\gamma-\nu)t} \quad (a_+, a_- \in \mathbb{R})$$

$$= e^{-\gamma t} (a_+ e^{-\nu t} + a_- e^{\nu t}) \quad \leftarrow \text{これは } e^{-\gamma t} \text{ と } e^{\pm \nu t} \text{ の積}$$

$$= e^{-\gamma t} \left\{ (a_+ + a_-) \frac{e^{\nu t} + e^{-\nu t}}{2} + (-a_+ + a_-) \frac{e^{\nu t} - e^{-\nu t}}{2} \right\}$$

$$= e^{-\gamma t} [a \cosh(\nu t) + b \sinh(\nu t)] \quad (a = a_+ + a_-, b = -a_+ + a_-)$$

$$\therefore \dot{x}(t) = -\gamma e^{-\gamma t} [a \cosh(\nu t) + b \sinh(\nu t)] + e^{-\gamma t} [a\nu \sinh(\nu t) + b\nu \cosh(\nu t)]$$

$t=0$  のとき  $x = x_0$ ,  $\dot{x} = v_0$  とおくと、

$$\begin{cases} x_0 = a \\ v_0 = -\gamma a + b\nu \end{cases} \quad \therefore \begin{cases} a = x_0 \\ b = \frac{v_0 + \gamma x_0}{\nu} \end{cases}$$

これをより、

$$x(t) = e^{-\gamma t} \left[ x_0 \cosh(\nu t) + \frac{v_0 + \gamma x_0}{\nu} \sinh(\nu t) \right] \quad (\nu = \sqrt{\gamma^2 - \omega_0^2}, \gamma > \omega_0)$$

これは、 $\nu = i\omega$  とおくと、

$$\cosh(i\omega t) = \cos \omega t, \quad \sinh(i\omega t) = i \sin \omega t$$

より、(1) に一致する。

(iii)  $\gamma = \omega_0$  のとき、

$$\lambda = -\gamma = -\omega_0$$

$Z(t) = ce^{-\gamma t} = ce^{-\omega_0 t}$  の1つのみとなってしまった。これでは解けない。

何が悪いのかは唯1つ!  $Z(t) = ce^{\gamma t}$  と仮定したのが悪い。

反省せねばならない。

そこで定数変化法というのを用いて、係数を定数  $C$  ではなく、

$t$  の関数  $A(t)$  にしてみよう。 (こう仮定すべきだった。)

$$Z(t) = A(t) e^{-\omega_0 t}$$

$$\dot{Z}(t) = \dot{A}(t) e^{-\omega_0 t} - \omega_0 A(t) e^{-\omega_0 t} = (\dot{A}(t) - \omega_0 A(t)) e^{-\omega_0 t}$$

$$\ddot{Z}(t) = \ddot{A}(t) e^{-\omega_0 t} - \omega_0 \dot{A}(t) e^{-\omega_0 t} - \omega_0 \dot{A}(t) e^{-\omega_0 t} + \omega_0^2 A(t) e^{-\omega_0 t} \\ = (\ddot{A}(t) - 2\omega_0 \dot{A}(t) + \omega_0^2 A(t)) e^{-\omega_0 t}$$

$Z(t)$  の ① の解だとすると、 $\gamma = \omega_0$  に注意して、

$$(\ddot{A} - 2\omega_0 \dot{A} + \omega_0^2 A) e^{-\omega_0 t} + 2\omega_0 (\dot{A} - \omega_0 A) e^{-\omega_0 t} + \omega_0^2 A e^{-\omega_0 t} = 0$$

$$\therefore \ddot{A} e^{-\omega_0 t} = 0$$

$$e^{-\omega_0 t} \neq 0 \text{ より}$$

$$\ddot{A}(t) = 0$$

$$\therefore \dot{A}(t) = a_0$$

$$\therefore A(t) = a_0 + a_1 t \quad (a_0, a_1 \text{ は積分定数}) \quad (t \text{ の高々1次式})$$

すなわち、つなぐとも

$$A(t) = 1, \quad A(t) = t$$

のときの  $x(t)$  は解である。つまり、(いずれも  $\ddot{A}(t) = 0$  となるので OK)

$e^{-\omega_0 t}$  も  $t e^{-\omega_0 t}$  も ① の解になる

の  $\therefore$  の 2 つを任意に重ね合わせて ( $\therefore$  ④) ① の解  $x(t)$  は、

$$x(t) = a e^{-\omega_0 t} + b t e^{-\omega_0 t}$$

$$\dot{x}(t) = -a \omega_0 e^{-\omega_0 t} + b e^{-\omega_0 t} - b \omega_0 t e^{-\omega_0 t}$$

$t = 0$  で  $x = x_0, \dot{x} = v_0$  とすると、

$$\begin{cases} x_0 = a \\ v_0 = -a \omega_0 + b \end{cases} \quad \therefore \quad \begin{cases} a = x_0 \\ b = v_0 + x_0 \omega_0 \end{cases}$$

を代入し、

$$x(t) = e^{-\omega_0 t} [x_0 + (v_0 + \omega_0 x_0) t] = e^{-\gamma t} [x_0 + (v_0 + \gamma x_0) t] \quad (\gamma = \omega_0)$$

以上まとめると、 $x(0) = x_0, \dot{x}(0) = v_0, \omega_0 = \sqrt{\frac{g}{l}}$  として、

(i)  $\gamma < \omega_0$  のとき、

$$x(t) = e^{-\gamma t} \left[ x_0 \cos(\omega t) + \frac{v_0 + \gamma x_0}{\omega} \sin(\omega t) \right], \quad \omega = \sqrt{\omega_0^2 - \gamma^2} : \text{減衰振動}$$

(ii)  $\gamma > \omega_0$  のとき、

$$x(t) = e^{-\gamma t} \left[ x_0 \cosh(\nu t) + \frac{v_0 + \gamma x_0}{\nu} \sinh(\nu t) \right], \quad \nu = \sqrt{\gamma^2 - \omega_0^2} : \text{過減衰解}$$

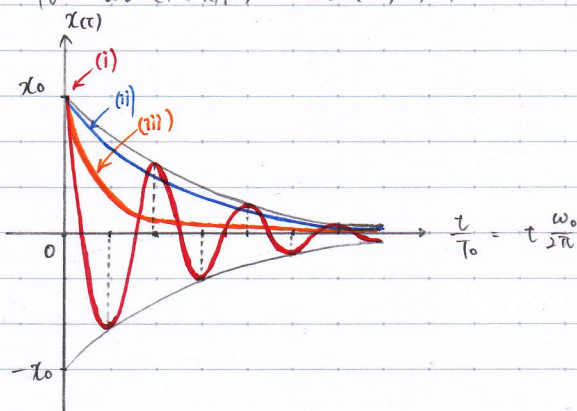
$\gamma > \omega_0$  のときの弱い解も  
出てくる

(iii)  $\gamma = \omega_0$  のとき、

$$x(t) = e^{-\gamma t} [x_0 + (v_0 + \gamma x_0) t] : \text{臨界減衰解}$$

( $\uparrow v_0 \rightarrow 0$  だと  $x(t) \cong x_0 e^{-\gamma t} (1 + \gamma t)$  となる)

$T_0 = \frac{2\pi}{\omega_0}$  (周期) として、グラフは次のようになる。



### (3) 自転の効果

ここからは話が変わり、"動く座標系"について考察する。

(1), (2) は地球上は固定座標系という前提のもと、考えていた。

しかし実際は地球は自転しているので、相対的な運動であり、

慣性系でない、すなわち非慣性系なのである。

(p.3~4より、そのための補正なしでは法則が成立しない)

ではどうすれば慣性系と同じように扱えるか、数式を用いて見ていくことにする。

右図において、

$O$  の  $\{e_x, e_y, e_z\}$  を慣性系とし、

新しく座標系  $O'$  の  $\{e_{x'}, e_{y'}, e_{z'}\}$  を

とし ( $O'$  は新しい基準点かつ時間変化する)

とする。

また右図のように  $r_0, r, r'$  を定める。

このとき、

$$\begin{cases} r = x e_x + y e_y + z e_z \\ r' = x' e_{x'} + y' e_{y'} + z' e_{z'} \\ r = r_0 + r' \end{cases}$$

$m \ddot{r} = F$  であるから、 ~~$m \ddot{r} = F$~~   $\rightarrow m \ddot{r}' = F + F'$  であることはすぐわかる。

$$\left( \begin{array}{l} \text{もちろん、} r = r_0 + r' \text{ より} \\ \ddot{r} = \ddot{r}_0 + \ddot{r}' \\ \ddot{r} = \ddot{r}_0 + \ddot{r}' \end{array} \right) \text{である}$$

ここで、

$$r' = x' e_{x'} + y' e_{y'} + z' e_{z'} \text{ より、}$$

$$\ddot{r}' = \ddot{x}' e_{x'} + \ddot{y}' e_{y'} + \ddot{z}' e_{z'} + \underbrace{x' \ddot{e}_{x'} + y' \ddot{e}_{y'} + z' \ddot{e}_{z'}}_{\text{補正の力}} \dots (*)$$

(\*) で、時間変化するから、 $e_{x'} \neq e_x, e_{y'} \neq e_y, e_{z'} \neq e_z$  とする

(\*) を  $e_{x'}, e_{y'}, e_{z'}$  を用いて表すことが出来るのは、極座標のときと同じように上手くいくはずなので、それを考えてみることにしよう。

以下、見やすいように、 $([ \text{内} ] \text{の} \text{中})$

$$\{x, y, z\} \rightarrow \{1, 2, 3\}, \{e_{x'}, e_{y'}, e_{z'}\} \rightarrow \{e_1, e_2, e_3\}$$

と書くことにする。

このとき、(\*) を  $e_1, e_2, e_3$  とする、すなわち  $e_{x'}, e_{y'}, e_{z'}$  を

用いて表すので、

$$\begin{cases} \vec{e}_1' = \omega_{11} \vec{e}_1 + \omega_{12} \vec{e}_2 + \omega_{13} \vec{e}_3 & \cdots \textcircled{A} \\ \vec{e}_2' = \omega_{21} \vec{e}_1 + \omega_{22} \vec{e}_2 + \omega_{23} \vec{e}_3 & \cdots \textcircled{B} \\ \vec{e}_3' = \omega_{31} \vec{e}_1 + \omega_{32} \vec{e}_2 + \omega_{33} \vec{e}_3 & \cdots \textcircled{C} \end{cases}$$

と書けるとする。(というか書けるはず。)

$\Rightarrow$   $\vec{e}_i'$  ( $i=1, 2, 3$ ) は基底ベクトルなので、

$|\vec{e}_i'| = 1$  も用いる。

$$\begin{cases} \vec{e}_i' \cdot \vec{e}_i' = 1 & \cdots \textcircled{1} \end{cases}$$

$$\begin{cases} \vec{e}_i' \cdot \vec{e}_j' = 0 \quad (i \neq j) & \cdots \textcircled{2} \end{cases}$$

であるから、

①を両辺で微分して、

$$\vec{e}_i' \cdot \vec{e}_i' + \vec{e}_i' \cdot \dot{\vec{e}}_i' = 0$$

$$\therefore \vec{e}_i' \cdot \dot{\vec{e}}_i' = 0$$

( $\therefore \vec{e}_i' \perp \dot{\vec{e}}_i'$ )

①に両辺  $\vec{e}_1'$  を、②に両辺  $\vec{e}_2'$  を、③に両辺  $\vec{e}_3'$  を内積すると、②を用いて、

$$\omega_{11} = 0, \omega_{22} = 0, \omega_{33} = 0$$

と分かる。

②を両辺で微分して、

$$\vec{e}_i' \cdot \vec{e}_j' + \vec{e}_i' \cdot \dot{\vec{e}}_j' = 0$$

$$\therefore \vec{e}_i' \cdot \dot{\vec{e}}_j' = -\vec{e}_i' \cdot \dot{\vec{e}}_j$$

①に両辺  $\vec{e}_2'$ 、②に両辺  $\vec{e}_1'$  を内積した2式を比較、

②に両辺  $\vec{e}_3'$ 、③に両辺  $\vec{e}_2'$  を内積した2式を比較、

③に両辺  $\vec{e}_1'$ 、①に両辺  $\vec{e}_3'$  を内積した2式を比較

すると、②を用いて、

$$\omega_{12} = -\omega_{21} \equiv \omega_{3(12)}$$

$$\omega_{23} = -\omega_{32} \equiv \omega_{1(23)}$$

$$\omega_{31} = -\omega_{13} \equiv \omega_{2(31)}$$

改めて定義する

と分かる。

これを "2つを用いて、① ② ③を書き直してみよう。

その前に  $\vec{\omega} \equiv \omega_1 \vec{e}_1' + \omega_2 \vec{e}_2' + \omega_3 \vec{e}_3'$  と定義することにしておく。

また  $\vec{r}' = x' \vec{e}_1' + y' \vec{e}_2' + z' \vec{e}_3'$  と書けることも思い出ししておく。

$$\begin{cases} \vec{e}_1' = \omega_3 \vec{e}_2' - \omega_2 \vec{e}_3' \\ \vec{e}_2' = -\omega_3 \vec{e}_1' + \omega_1 \vec{e}_3' \\ \vec{e}_3' = \omega_2 \vec{e}_1' - \omega_1 \vec{e}_2' \end{cases}$$

と書けた。これを "2つを用いて、④) を書き直してみよう。

$$(\dot{\mathbf{r}}) = \dot{x}'\mathbf{e}_1' + \dot{y}'\mathbf{e}_2' + \dot{z}'\mathbf{e}_3'$$

$$= \dot{x}'(\omega_3\mathbf{e}_2' - \omega_2\mathbf{e}_3') + \dot{y}'(-\omega_3\mathbf{e}_1' + \omega_1\mathbf{e}_3') + \dot{z}'(\omega_2\mathbf{e}_1' - \omega_1\mathbf{e}_2')$$

$$= (\omega_3\dot{z}' - \omega_2\dot{y}')\mathbf{e}_1' + (\omega_3\dot{x}' - \omega_1\dot{z}')\mathbf{e}_2' + (\omega_1\dot{y}' - \omega_2\dot{x}')\mathbf{e}_3'$$

$$= \boldsymbol{\omega} \times \mathbf{r}' \quad \dots (\ast)'$$

と書ける。

従って、[ 9 前 から 続 け る ]

$$\frac{d\mathbf{r}'}{dt} = \dot{\mathbf{r}}' = \dot{x}'\mathbf{e}_1' + \dot{y}'\mathbf{e}_2' + \dot{z}'\mathbf{e}_3' + \boldsymbol{\omega} \times \mathbf{r}' \quad (\because (\ast)')$$

$$= \underbrace{\left( \frac{dx'}{dt}\mathbf{e}_1' + \frac{dy'}{dt}\mathbf{e}_2' + \frac{dz'}{dt}\mathbf{e}_3' \right)}_{= \frac{d^*\mathbf{r}'}{dt} \text{ と表記するとよい}} + \boldsymbol{\omega} \times \mathbf{r}' \quad \dots (17)$$

$$\left( \begin{array}{l} = \frac{d^*\mathbf{r}'}{dt} \text{ と表記するとよい} \\ (\text{すなわち } \frac{d^*\mathbf{r}'}{dt} \text{ は、係数のみで微分可能という}) \end{array} \right)$$

となる。

この式の図形的な意味はなんだろうか？

$$\frac{d\mathbf{r}'}{dt} = \frac{d^*\mathbf{r}'}{dt} + \boldsymbol{\omega} \times \mathbf{r}'$$

より、

$$\Delta \mathbf{r}' = \underbrace{\Delta^*\mathbf{r}'}_{\text{二重・0.01固定系}} + \underbrace{(\boldsymbol{\omega} \times \mathbf{r}') \Delta t}_{\text{二重の大きさは } \theta \text{ を } \boldsymbol{\omega} \times \mathbf{r}' \text{ のなす角として。}}$$

$$\left( \begin{array}{l} \text{二重・0.01固定系} \\ \text{二重の大きさは } \theta \text{ を } \boldsymbol{\omega} \times \mathbf{r}' \text{ のなす角として。} \end{array} \right) \quad |\boldsymbol{\omega}| |\mathbf{r}'| \sin \theta \cdot \Delta t$$

$$= \omega \Delta t \times r' \sin \theta \quad (|\boldsymbol{\omega}| = \omega, |\mathbf{r}'| = r')$$

角度 半径 と見なそう。

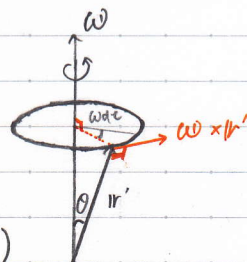
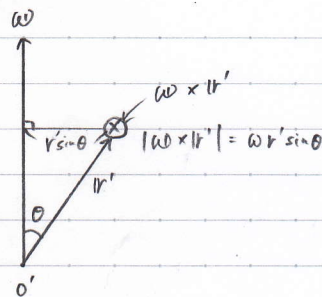
( $\omega$  は、単位時間あたりの回転角の角速度)

つまり、右図のようにうまく  $\omega$  を定めたら、         は

回転を表していることが分かった。

( $\omega$  の方向が回転軸)

$\omega$  は **角速度ベクトル** と呼ばれる。



さて、これで何を言っているのか理解できた人は二重読み飛ばしてよい。(筆者は正直うまく理解できなかった)

そもそも基底ベクトルが時間変化するの、回転のみで

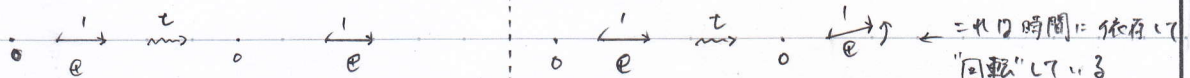
ある。なぜなら、ベクトルの時間変化とは、“長さ(大きさ)”と

“方向”が時間と共に依存して変化することを意味する。

しかし、基底ベクトルは長さ(大きさ)が“1”で固定

されているので、“方向”しか変化しないのである。

“方向”のみの変化は、“回転”を表す



これは原点は動いているものの、基底は変化なし。

よって、実は  $O' \{e_{x'}, e_{y'}, e_{z'}\}$  は回転している座標系だったのだ。

(先に言ってくれたのは分かりにくくてすよね...)

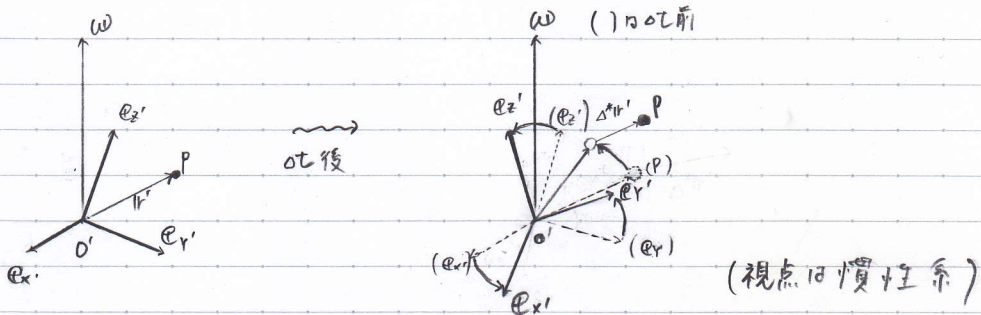
$\dot{r}'$  に座標の微分 ( $\frac{d^*r'}{dt}$ ) 以外に  $\omega \times r'$  という謎の項が  
発生したのはこのためである。

$$\begin{aligned}\omega \times r' &= \omega \times (x' e_{x'} + y' e_{y'} + z' e_{z'}) \\ &= x' \cdot \omega \times e_{x'} + y' \cdot \omega \times e_{y'} + z' \cdot \omega \times e_{z'}\end{aligned}$$

と書き下せばなんとなく見えてくるだろうが。

$e_{x'}$  も  $e_{y'}$  も  $e_{z'}$  も  $\omega$  を軸として同じ角速度  $\omega$  で回転している  
のである。便宜的に  $O'$  は回転のみとすると、

以下の図のようになる。



これで少し分かりやすくなったはずだ。

さて、元に戻ろう。これらを用いると、 $r$  と  $\dot{r}$  は以下のよう表せる。

$$\begin{aligned}r &= r_{O'} + r' \\ &= r_{O'} + (x' e_{x'} + y' e_{y'} + z' e_{z'})\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\dot{r} &= \dot{r}_{O'} + \dot{r}' \\ &= \dot{r}_{O'} + \frac{d^*r'}{dt} + \omega \times r' \quad (\because (b))\end{aligned}$$

よって、

$$\begin{aligned}\ddot{r} &= \ddot{r}_{O'} + \frac{d}{dt} \left( \frac{d^*r'}{dt} \right) + \frac{d}{dt} (\omega \times r') \\ &= \ddot{r}_{O'} + \left\{ \frac{d^*}{dt} \left( \frac{d^*r'}{dt} \right) + \omega \times \frac{d^*r'}{dt} \right\} + \left( \frac{d\omega}{dt} \times r' + \omega \times \frac{dr'}{dt} \right) \\ &= \ddot{r}_{O'} + \left( \frac{d^*}{dt} \right)^2 r' + \omega \times \frac{d^*r'}{dt} + \left( \frac{d^*\omega}{dt} + \omega \times \omega \right) \times r' + \omega \times \left( \frac{d^*r'}{dt} + \omega \times r' \right) \\ &= \ddot{r}_{O'} + \left( \frac{d^*}{dt} \right)^2 r' + 2\omega \times \frac{d^*r'}{dt} + \omega \times (\omega \times r') + \frac{d^*\omega}{dt} \times r' \quad (\because \omega \times \omega = 0)\end{aligned}$$

実はこれ、 $O'$  系での見かけの加速度

となる。

今、 $O$ 系は慣性系と約束しているので、ニュートンの3法則がそのまま成立し、

$$m \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = \mathbf{F}$$

このとき  $O'$ 系では、

$$m \frac{d^2 \mathbf{r}_0'}{dt^2} + m \left( \frac{d^2}{dt^2} \right)^* \mathbf{r}' + 2m\omega \times \frac{d^* \mathbf{r}'}{dt} + m\omega \times (\omega \times \mathbf{r}') + m \frac{d^* \omega}{dt} \times \mathbf{r}' = \mathbf{F}$$

従って、これを整理して  $O'$ 系での運動方程式は、

$$m \left( \frac{d^2}{dt^2} \right)^* \mathbf{r}' = \mathbf{F} - m \frac{d^2 \mathbf{r}_0'}{dt^2} - 2m\omega \times \frac{d^* \mathbf{r}'}{dt} - m\omega \times (\omega \times \mathbf{r}') - m \frac{d^* \omega}{dt} \times \mathbf{r}' \quad \dots ①$$

コリオリの力                      遠心力                      角速度が変化するとの効果

(通常は  $O$  と  $O'$  を一致させ、 $\omega$  は定ベクトルであるとして、)

$$m \left( \frac{d^2}{dt^2} \right)^* \mathbf{r}' = \mathbf{F} - 2m\omega \times \frac{d^* \mathbf{r}'}{dt} - m\omega \times (\omega \times \mathbf{r}')$$

と書くことが多い(気がする)。

さて、これを地球上の運動に当てはめてみよう。

地球が角速度  $\omega$  で自転しているとして、緯度  $\lambda$  地点

での運動を考える。(可なり  $\omega$  は定ベクトル)

右下図より、

$$\omega = -(\omega \cos \lambda) \mathbf{e}_{x'} + (\omega \sin \lambda) \mathbf{e}_{z'} \quad \dots ②$$

また、

$$\mathbf{F} = -mg \mathbf{e}_z \quad \dots ③$$

とする。(また重力のみ)

ここで、 $\mathbf{r}_0'$  は  $\omega$  を軸として、角速度  $\omega$  で回転しているので、

$$\begin{cases} \frac{d\mathbf{r}_0'}{dt} = \omega \times \mathbf{r}_0' \\ \frac{d^2 \mathbf{r}_0'}{dt^2} = \frac{d\omega}{dt} \times \mathbf{r}_0' + \omega \times \frac{d\mathbf{r}_0'}{dt} \\ = \omega \times (\omega \times \mathbf{r}_0') \quad \dots ④ \end{cases}$$

← [ ] の前あたり思い出して  
とさなければなりません

( $\because \omega$  は定ベクトルなので、 $\frac{d\omega}{dt} = 0$ )

②より、④は、

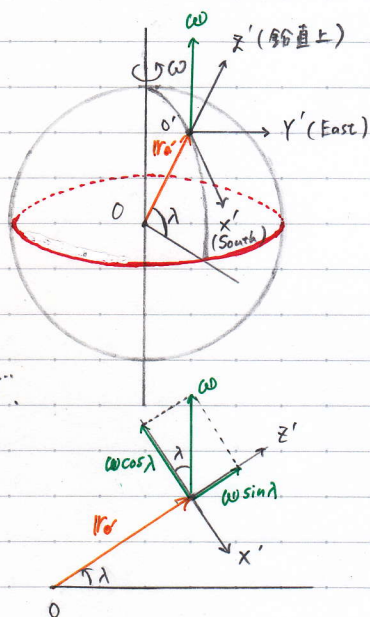
$$\begin{aligned} \omega \times (\omega \times \mathbf{r}_0') &= \omega \times \{ (-\omega \cos \lambda \mathbf{e}_{x'} + \omega \sin \lambda \mathbf{e}_{z'}) \times r_0' \mathbf{e}_{z'} \} \\ &= \omega \times (\omega \cos \lambda \cdot r_0' \mathbf{e}_{y'}) \\ &= (-\omega \cos \lambda \mathbf{e}_{x'} + \omega \sin \lambda \mathbf{e}_{z'}) \times (\omega \cos \lambda \cdot r_0' \mathbf{e}_{y'}) \\ &= -\omega^2 \cos^2 \lambda \cdot r_0' \mathbf{e}_{z'} - \omega^2 \sin \lambda \cos \lambda \cdot r_0' \mathbf{e}_{x'} \\ &= -r_0' \omega^2 (\cos \lambda \mathbf{e}_{z'} + \sin \lambda \mathbf{e}_{x'}) \cos \lambda \quad \dots ⑤ \end{aligned}$$

となる。

以上、①、③、④、⑤ と、 $\frac{d\omega}{dt} = 0$  かつ、 $\frac{d^* \omega}{dt} = 0$  であることより、

$$\begin{aligned} m \left( \frac{d^2}{dt^2} \right)^* \mathbf{r}' &= -mg \mathbf{e}_z - m r_0' \omega^2 (\cos \lambda \mathbf{e}_{z'} + \sin \lambda \mathbf{e}_{x'}) \cos \lambda - m \omega \times (\omega \times \mathbf{r}') \\ &\quad - 2m\omega \times \frac{d^* \mathbf{r}'}{dt} \quad \text{重力の } \frac{1}{500} < 5 \rightarrow \text{無視} \quad \text{地表近くでは重力の } \frac{1}{500} < 5 \rightarrow \text{無視} \\ &\approx -mg \mathbf{e}_z - 2m\omega \times \frac{d^* \mathbf{r}'}{dt} \quad \dots ⑥ \end{aligned}$$

残念ながらこれは無視できない



いま、②より、

$$\begin{aligned} -2m\omega \times \frac{d^*}{dt} \mathbf{r}' &= -2m\omega (-\cos\lambda \mathbf{e}_{x'} + \sin\lambda \mathbf{e}_{z'}) \times (\dot{x}' \mathbf{e}_{x'} + \dot{y}' \mathbf{e}_{y'} + \dot{z}' \mathbf{e}_{z'}) \\ &= 2m\omega \sin\lambda \dot{y}' \mathbf{e}_{x'} - 2m\omega (\cos\lambda \dot{z}' + \sin\lambda \dot{x}') \mathbf{e}_{y'} + 2m\omega \cos\lambda \dot{y}' \mathbf{e}_{z'} \end{aligned}$$

7.5の7.、⑥は

$$\begin{aligned} (m\ddot{x}') \mathbf{e}_{x'} + (m\ddot{y}') \mathbf{e}_{y'} + (m\ddot{z}') \mathbf{e}_{z'} \\ = (2m\omega \sin\lambda \dot{y}') \mathbf{e}_{x'} + \{-2m\omega (\cos\lambda \dot{z}' + \sin\lambda \dot{x}')\} \mathbf{e}_{y'} + (2m\omega \cos\lambda \dot{y}' - mg) \mathbf{e}_{z'} \quad \text{--- ⑥'} \end{aligned}$$

となる。

いまは  $\mathbf{F} = -mg \mathbf{e}_z$  としていた。ので、⑥(⑥')より、地球の自転の影響を  
加味した落体の運動方程式となる。

よって、成分ごとに見ていこう。⑥'より、

$$\begin{cases} m\ddot{x}' = 2m\omega \sin\lambda \dot{y}' \\ m\ddot{y}' = -2m\omega (\cos\lambda \dot{z}' + \sin\lambda \dot{x}') \\ m\ddot{z}' = 2m\omega \cos\lambda \dot{y}' - mg \end{cases}$$

コリオリ力は無視出来ないといえる。小さいのは確かなのて、

$|\dot{z}'| \gg |\dot{x}'|, |\dot{y}'| (\approx 0)$  と近似する = とにする。

従って、

$$\begin{cases} \ddot{x}' \approx 0 \\ \ddot{y}' \approx -2\omega \cos\lambda \dot{z}' \quad \text{--- ⑦} \\ \ddot{z}' \approx -g \quad \text{--- ⑧} \end{cases}$$

$t=0$  で、 $x' = y' = 0$ ,  $z' = h$ ,  $\dot{y}' = \dot{z}' = 0$  とする。

⑧より、

$$\dot{z}' = -gt \quad \therefore \underline{z' = h - \frac{1}{2}gt^2} \quad \text{--- ⑨}$$

= 代入⑦より、

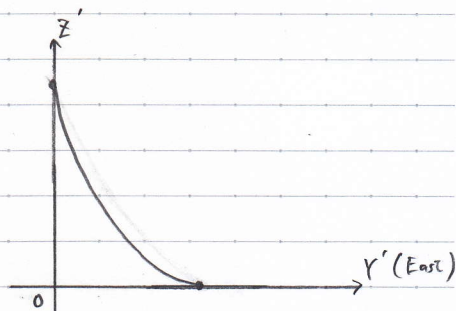
$$\begin{aligned} \ddot{y}' &= 2\omega \cos\lambda \cdot gt \\ \therefore \dot{y}' &= \omega \cos\lambda \cdot gt^2 \\ \therefore \underline{y' = \frac{1}{3}\omega \cos\lambda \cdot gt^3} \quad \text{--- ⑩} \end{aligned}$$

⑨, ⑩より、

$$\underline{y' = \frac{1}{3}\omega g \cos\lambda \left\{ \frac{2(h-z')}{g} \right\}^{\frac{3}{2}}}$$

物体はこの曲線に沿って落下していく。

この曲線を **サイルの曲線** という。



さて、今は外力は重力のみだったから、今度は、地球の自転の  
影響を加味した振り子の運動を見ていこう。

⑥の右辺に  $\pi$  をつければよいので、

$$m \left( \frac{d^*}{dt} \right)^2 \mathbf{r}' = -mg \mathbf{e}_z - 2m\omega \times \frac{d^*}{dt} \mathbf{r}' + \pi \quad \text{--- ⑪}$$

簡単のために、微小近似を可とする。すなわち、

$$\ddot{x}' \approx 0, \ddot{y}' \approx 0, \ddot{z}' \approx 0 \text{ と可。}$$

よって、

$$m\ddot{z}' = -mg + 2m\omega \cos \lambda \dot{y}' + T$$

$$\approx -mg + T$$

$$\ddot{z} \approx 0 \text{ より、 } T \approx mg$$

従って、成分ごとの運動方程式は、(Tのx成分とy成分は前と同じ)

$$\begin{cases} m\ddot{x}' = -m\frac{g}{2}x' + 2m\omega \sin \lambda \dot{y}' \\ m\ddot{y}' = -m\frac{g}{2}y' - 2m\omega (\cos \lambda \dot{z}' + \sin \lambda \dot{x}') \\ m\ddot{z}' = 2m\omega \cos \lambda \dot{y}' (\approx 0) \end{cases}$$

すなわち、 $\ddot{z}' \approx 0$  も考慮して、

(素直に単振動が可)

$$\begin{cases} \ddot{x}' = -\frac{g}{2}x' + 2\omega \sin \lambda \dot{y}' \quad \dots (12) \\ \ddot{y}' = -\frac{g}{2}y' - 2\omega \sin \lambda \dot{x}' \quad \dots (13) \end{cases}$$

$$(13) \times x' - (12) \times y' \text{ より、}$$

$$x'\ddot{y}' - y'\ddot{x}' = -2\omega \sin \lambda (x'\dot{x}' + y'\dot{y}') = -\omega \sin \lambda \frac{d}{dt}(x'^2 + y'^2)$$

$$\frac{d}{dt}(x'\dot{y}' - \dot{x}'y') = -\omega \sin \lambda \frac{d}{dt}(x'^2 + y'^2)$$

両辺を積分して、

$$x'\dot{y}' - \dot{x}'y' = -\omega \sin \lambda (x'^2 + y'^2) + C \quad (C \text{ は積分定数})$$

$$t=0 \text{ で } x'=0 \text{ かつ } y'=0 \text{ (0'を通る)} \text{ と可。}$$

$$C=0$$

$$\therefore x'\dot{y}' - \dot{x}'y' = -\omega \sin \lambda (x'^2 + y'^2) \quad \dots (14)$$

ここで、

$$\begin{cases} x' = r' \cos \varphi \\ y' = r' \sin \varphi \end{cases} \quad (\varphi \text{ は } \lambda \text{ 方向に } x-y \text{ 平面内での角度、 } r' = \sqrt{x'^2 + y'^2}, \varphi \in [0, 2\pi), r = r(t), \varphi = \varphi(t))$$

と置く。

$$\begin{cases} \dot{x}' = \dot{r}' \cos \varphi - r' \dot{\varphi} \sin \varphi \\ \dot{y}' = \dot{r}' \sin \varphi + r' \dot{\varphi} \cos \varphi \end{cases}$$

である。

$$\begin{aligned} x'\dot{y}' - \dot{x}'y' &= r' \cos \varphi (\dot{r}' \sin \varphi + r' \dot{\varphi} \cos \varphi) - r' \sin \varphi (\dot{r}' \cos \varphi - r' \dot{\varphi} \sin \varphi) \\ &= r'^2 \dot{\varphi} \quad \dots (15) \end{aligned}$$

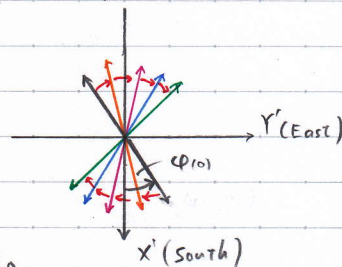
(14), (15) より、

$$r'^2 \dot{\varphi} = -\omega \sin \lambda \cdot r'^2 \quad \therefore \dot{\varphi} = -\omega \sin \lambda$$

$$\therefore \varphi(t) = -(\omega \sin \lambda) t + \varphi(0)$$

すなわち、XY平面内で時計まわり回転する。

単振動する。(北半球) これはフーコーの振り子という。



以上で終了です。お疲れ様でした。参考文献は「物理学序論としての力学」藤原邦男著です。

筆者：2016年度 理2-4組 力学A シェ対 (3! Twitter: @km31115)